
魔法わんこアマ公 マギカ

いぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法わんこアマ公 マギカ

【Nコード】

N1551T

【作者名】

いぬ

【あらすじ】

まどか マギカと大神のくるすおーばー。大神知ってないとわけがわからないよ！
大神ことアマ公に振り回されるまどか達。
もう何も怖くないって人はどうぞ。

注：この小説はアマ公愛により書かれています。主人公は間違いないアマ公です。

ピクシブにも掲載中

わけがわからないよ（前書き）

大神の事を知らない人へ簡単な説明。

大神ことアマ公は天照大神。早い話神様です。太陽神です。サイキョーです。

でも信仰の無い現代においてはただの狼です。見た目は犬です。人によって違う名前と呼ばれるのは仕様です。

緊迫した雰囲気が一瞬でほのぼのに変わるのがアマ公くおりでいです。

アマ公が主人公な時点で絶望なんてあるわけない。

そんな小説です。

（人）

わけがわからないよ

「独り暮らしだから遠慮しないで。ろくにおもてなしの準備もないんだけど」

そう言い玄関の扉を開けると少し照れくさそうに客人を招くバママ。しかしその部屋は独り暮らしとしては少々持て余すほどのものだった。

「素敵なお部屋……」

「うわぁ……」

各々感嘆の声を漏らし、呆気にとられるのはバママにより招待された鹿目まどかと美樹さやかの二人だった。

二人はその日の下校途中に不思議な声を聞き、それに誘われるまま入っていったビルで異形のモノに襲われた。

それは魔女と呼ばれるモノの手下。

結界という現世から隔離された世界で生きるモノ達だ。

そこに普通の人間が迷い込んでしまうと魔女もしくは手下により狩られてしまい、生命力を吸われ二度とそこから出られなくなる。

その為結界内で命を落とすと表の世界でその肉体が見つかることは無い。

そんな危機的状況から救ったのがバママだった。

ママは二人を助けると、自分の正体。魔法少女としての自分と魔法の個とを説明する為、そして二人の気持ちを落ち着かせる意味合いも兼ねて自宅へを招待したのだった。

ママは慣れた手つきで部屋の電気を付けると奥へと進み、よく自身がお茶を飲むテーブルへと二人を招いた。まどかとさやかがママに促されるままテーブルに着くと、そこへ真っ白い大きな何かが寄ってきた。

「わんっ」

それは白く、ふさふさな毛並みを持つ犬だった。

いや、厳密に言えばそれは犬ではない。それは狼と呼ばれる獣であり、この現代日本において存在しないはずの動物だった。

しかし、どこか抜けたような顔つきのその狼は、どこからどう見てもただの白い犬だった。

「わあ、わんちゃんだ」

「うわあ、ビックリしたあ」

「ふふ、ごめんなさい。驚かせるつもりはなかったのだけれど」

マミは犬に近寄ると膝を付き、その頭を優しく撫でる。大人しく、気持ち良さそうに受けている犬を見ていたまどかは恐る恐るといった感じでマミに聞く。

「あの、噛み付いたりしませんか？」

「大丈夫よ。この子凄く頭がいいの。触ってみる？」

「ええっと……」

まどかはゆっくりと手を伸ばすと犬の横顔付近を撫でた。

「わあ、ふかふかだあ」

まどかの手はしだいに大きく動くようになり、そのうちには抱きつくような体勢でその白い毛を撫で回す。

「くうう、あたしにも触らせろー」

その様子を見ていたさやかが我慢できずといった様子で制服に毛が付くのもお構いなしで飛びついた。

決して牙を立てようとしたり嫌がって逃げようともしない犬を二人はおもちゃのように可愛がった。

しばらく経ってマミが紅茶とケーキを用意し、その甘い香りが部屋中を満たした。

「マミさんっていいなあ。こんな素敵な部屋にこんな可愛いわんちゃんと一緒に住んで」

ひと時のティーパーティーをおしゃべりを交え過ごした後、まどか

が犬を撫でながら言うが、マミはどこか困ったような口調だった。

「ふふ、実はこの子は私が飼ってるわけじゃないの」

「え？ 違うんですか？」

フオークを口に咥えたまま器用にしゃべるさやかだが、その姿はお世辞にも行儀が良いとはいえない。

「ええ。この子は昨日帰りがけに倒れてるのを見かけて、それでおなか空いてたみたいだから持ってたパンをあげたらなんか懐かれちゃって」

その時を思い浮かべられるように微笑むマミの表情は、浴びている西日の影響か若干赤味掛かっているようにも見える。

「ええー、こんな可愛いのに捨てられちゃったの？」

「それがそういうわけじゃないみたい。たぶん色々放浪している子だと思うの。こんなに賢いのに捨てられるなんて思えないし」

犬はまだかの隣で呆けた顔をしている。その顔だけを見ればとても賢そうには見えない。

「うんうん。確かに賢いわ。全然吼えないしね。で、さっきから気になってただけけど、なんでキュウベえは隠れてんの？」

さやかがふと、マミの影に隠れているキュウベえに気付いた。最初から三人に付いて来ており、入ってからもずっとマミの傍にいたのだが、常に犬の視線から逃れるようにしていたのだ。

「それはね、この子キュウベえがお気に入りみたいでよくじゃれるんだけど、キュウベえにはちよつとそれが過激すぎるのよね」

「君達も体中を涎でべとべとにされたら少しは僕の気持ちかわかるんじゃないかな？」

「あつははは……。そりゃ確かに過激なスキンシップだわ」

犬とキュウベえの体格差は数倍もある。犬にとっては軽いものであっても、その足ほどしかない体躯のキュウベえにとっては非常に大きいものなのだ。

どこか悲壮感の漂う口調でそう言うキュウベえに、さやかは乾いた笑いを上げるしか出来なかった。

「あ、そうだマミさん。すごい今更なんだけどこの子名前とか付けてるんですか？」

もう日も暮れ始め、夕食時を過ぎようかとしたころ、犬とじゃれていたさやかがそれに気付いた。マミは初めから犬の事を名前で呼んではおらず、まどかやさやかも「わんちゃん」と呼んでいただけだった。

しかし、マミは視線を少し落とし、片手で自分の毛先をいじりながら言う。

「ううん。私も昨日からばたばたしてたし、それにまだ私が飼うって決めたわけでもないからどうしようかと思って」

捨てられているのを拾ったのと違い、ただ倒れていたのを助けただけに過ぎず、マミはこの犬を本当に自分が拾ってよかったのか未だに自信が持てていない様子だった。

そんなマミを勇気付けるように、さやかは身を乗り出して提案する。

「じゃあさ、あたしらで決めちゃいませんか？ だってこんなに可愛いのに飼わない手は無いですよ」

「うーん、そうねえ」

「それに、もしかしたらこの子にも凄い力とかあるかもしれないよ」

「確かに可愛いわんちゃんだけど、それはないんじゃないかなあ」

「むう、まどかには見えないのね、この子が放つ魔法少女エネルギーがっ」

「ええ、さやかちゃん。そんなの見えるの？」

「いや、冗談で言ったんだけど……。まあいいや。ねえねえマミさん。飼っちゃいましょうよ。どうせどこからも文句来ませんって」

「うーん、そうね。じゃあフェンリルちゃんとかどうかな？」

「……」

「……」

空気が止まり、場には異様な雰囲気漂う。

「えっと、変……かしら？」

「いや……変っていうか」

「カッコイイ！」

「うええ、まどか。あんたマジ!？」

「ええー、だってカッコイイよ。あ、でもでもこんなに可愛いんだからもっと可愛い名前がいいかなあ」

「それじゃあ鹿目さんならどんな名前にするの？」

「んーっと、じゃあプリニーちゃんとか！」

「……投げたら爆発しそうな名前ね」

「ええ、でも可愛いよね？」

「凄く素敵な名前だと思っわ」

「ママさん!？」

「でしょ、えへへ。良かったねプリニーちゃん」

「いや、まどか。それは止めてあげようよ。なんかかわいそうだから」

「ええ、可愛いのに」

「それなら、美樹さんならどんな名前付けるのかしら？」

「えー、あたし？ あたしなら普通にシロちゃんとか」

「ダメだよそんなの。もっと可愛い名前にしようよ」

「そうね、できればいい名前付けてあげたいわね。ケルベロスとか」

「いやいやいや、ママさんそれ地獄の番犬だから。さっきよりゴツくなってますから」

「可愛い名前……パトラッシュとか！」

「それ死亡フラグだから止めてあげて！」

等々。

散々議論を交わすが、結局答えが出ることも無くただ時間だけが過ぎ去っていった。

「むう」

「うう」

「うー、この件は次回に持ち越してとこかしら。二人に任せてたらとんでもない名前付けられそうだし……」

さやかがそう締めくくろうとし、この場を収めようとしていた。

その間、ずっと自分を置き去りにされていた犬はキュウベえを舐めて遊んでおり、すでにキュウベえの体は水浴びでもしたほどにびしょ濡れになっていた。

キュウベえはそれに抵抗らしい抵抗もせず、半ば諦めたような雰囲気ですぐに吠えだした。困気で呟くだけだった。

『わけがわからないよ』

すっかり夜の帳が下りたマンション。

その玄関先でまどか、さやか、マミにお礼を言っていた。

結局夕飯までご馳走になった二人はマミの手料理に感激し、そして再度始まってしまった名前付けに無意味な時間を費やし現在に至る。

「それじゃ、夜遅いから気を付けてね」

「大丈夫ですって、それにこんな心強い味方がいるんだし」

「わんっ」

さやか、まどかが言うとおりに、中にいるマミとは違い名前の決まらない犬はまどか達と同じように外に出て尻尾を振っている。

初めはマミが送ろうとしたのだが、その話に割って入るように犬が一度だけ吠えた。それに何かを感じ取ったのか、マミは二人の護衛を犬に託すことにしたのだ。

「えへへ、家まで宜しくねプリニーちゃん」

「いや、まどかあんた……まあいいや。とにかく頼むわよ、シロ！」

「じゃあ二人を宜しくねオルトロスちゃん」

「えっと、もうどこからツツコンでいいやら……」

「わふ？」

首を傾げ愛想を振りまくが、どこか嬉しそうだ。いつまで経っても定まらない自分の名前に興味が無いのか、それともどうでもいい

のか。犬はどの呼ばれ方でも尾っぽを振り喜んでいたので。マミのマンションから離れ、街灯の下を二人と一匹は並んで歩いている。

日が暮れたとはいえ、まだまだ交通量は多く街の喧騒もある。そんな賑やか大通りを過ぎ、住宅街に差し掛かったところで二人は見知った顔をポツンと立つ街灯の下で見つけた。

「あ、転校生だ」

「……」

「ほむら、ちゃん……」

二人を待ち構えるようにして立っていたのは暁美ほむら。つい数刻前にキュウベえを襲っていた張本人だ。

思わず身構えるさやかと、不安げなまどか。そしてとぼけた顔の犬がトトトつとほむらに近付いていった。

「鹿目まどか。私は警告したはずよ。今とは違う自分になるうなど思わないきゃ！」

「あ」

「あわわ」

そしてあるうことが、ほむらのスカートの中にその鼻先を突っこんでしまったのだ。

「ちよつと、どこに顔を入れてるのよ！」

「あう？」

スカートから顔を出し首を傾げ、わからないといった感じの犬。だが所詮は獣で、人間の言葉を完全に理解しているわけでもなく、遊んでもらっているのと勘違いでもしてしまったのか今度はほむらのスカートを啜ってしまう。

ほむらは、ともすれば落ちそうになるスカートを必死で抑え犬を引き離すが、そんなことをすれば更に面白がるのが犬というものだった。

「い、いいから離れなさい！」

「……」

「……」

傍からみればじゃれあっているようにしか見えない光景。先ほどまで一瞬だけあった緊迫した雰囲気は霧散するように消え失せ、そこにあるのは犬に遊ばれている少女の姿だけだった。

「と、とにかく。私は警告したわ。これ以上この件に首を突っ込まないで。さもないと貴女の大切なものが全て失われるわよっ」

何とか犬を引き離し、息も絶え絶えにそう告げると暗闇の向こうへとほむらは消えていった。

「……いったわね」

「……いつちゃったね」

その後姿を呆然と見つめていた二人だが、不意にさやかが疑問を口にした。

「結局何がしたかったのかしら、あの転校生」

「わかんないけど、でも悪い子じゃないと思うの」

「そうかなあ。放課後の事もよくわからず仕舞いだし。なんでキユウベえ襲ったのかもわかんないけど」

そう、本来はそのことを訊くためにマミの部屋に上がった二人だが、結局終わってみるとケーキを食べて犬の名前を決めようと議論をただけだった。肝心なことは何一つ訊いていない。

だが、さやかは満足そうに再び傍に来た犬の頭を撫で褒め称えた。「ま、分かっているのはシロは立派にあたしらの護衛を成し遂げたっ
てことかしらね」

「ふふ、プリニーちゃん偉い偉い」

「わんっ」

頭を撫でられ嬉しそうに尻尾を振る犬だが、何故褒められているかはわかっていなさそうだった。

続く！

わけがわからないよ（後書き）

アマ公が犬にしか見えないのは信仰が足りないからです。祈りましよう。

ちなみに、小説内でアマ公が「天照」と呼ばれることはまずありません。

（人）

この毛並み、もっふもふよ（前書き）

この二話と次回まではどうやら本編と同じように進んでいきそうです。アマ公が好き勝手しだすのは四話以降になりそうですね。

今回も、もっふもふにしてやんよ！

この毛並み、もっふもふよ

「さて、それじゃ魔法少女体験コース第一弾、張り切っていきましょうか」

「はい」

「任せてくださいー!」

マミの掛け声にまどか、さやかの両名が元気良く答え、

「わんっ!」

白い犬も威勢良く吼えた。

「……」

「……」

放課後。

西日に照らされた並木道。そこに三人の少女と一匹の犬がいた。

「……えっと、マミさん？」

「わ、私だって連れてくるつもりは無かったのよ? でもどうしても付いていきたいって顔してたし、それにウチに一人で留守番させてたらかわいそうだし……」

マミと呼ばれた少女の顔には戸惑いの色が濃く見て取れる。視線は泳ぎ、手を胸の前で組み指が忙しく動いている。時折何か助けを求めるような目を犬に向けるが、犬はどこか抜けたような表情で首を傾げるだけでマミの期待する答えを言うような雰囲気ではなかった。そもそも犬は喋れない。

「いや、まあそれは何となく分かるんですけど。でも大丈夫なんですか?」

「勿論、怪我させるつもりはないわ。ちゃんと守るし、危なくなったら避難させるわ。当然あなた達もね、美樹さん」

そう言われ、しぶしぶといった感じで納得の頷きをするのは美樹さやか。疑いの空気を隠そうともせずマミを見つめるが、目を逸らされた。何かを言おうと口を開きかけるが、その足に寄り添うよう

に顔を擦り付けてくる犬に頬が緩んだ。

「はあ、マミさんがそういうならいいですけど。で、なんでまどかは嬉しそうなのよ?」

更にもう一人の少女、鹿目まどかはずっと犬を撫でており至福顔。初めから犬がいることを疑問に思っではいなさそうだった。

「え、だってブリトニーちゃんと一緒だったら心強いかなあ、なんて」

「ブリトニーって、あんた昨日はプリニーって呼んでなかったっけ?」

「えっへへ。変かな?」

照れくさそうに言うが、まどかは呼び名を変えようとする様子はない。それを見たさやかも爆弾ペンギンから人名に変わっただけマシと割り切りそれ以上言及するのは止めた。

「もういいわ……。つつこんでたらキリないし。あー、ちなみにマミさんは今日は何て呼んでるんですか?」

不意に話題を振られた時、マミは「一緒に行けて良かったね」と小声で犬に語りかけており、初めから連れてくる気だったことが誰の目にも明らかだったが、さやかは特に何も言わず諦め顔で見ただけだった。

「え、えっ? 私!? 私は、その……ダウンちゃんって呼んでただけど……」

「……マミさん。昨日から思ってたんですが、もしかして女神転生とか好きだったりしませんか?」

「なanananのことかしら? 良く言っている意味が分からないわっ。そ、そんなことより急ぎましょう。魔女は待ってなんかくれないわよっ」

口早にまくし立て、後輩達を引っ張っていくように歩き出すマミ。その後姿を見て苦笑いをしたまどかとさやかは置いていかれないように小走りでマミを追いかけ、犬は散歩のつもりなのか何度か吼えながら嬉しそうにしているのだった。

「結構近いわね」

学校近くのエリアから程遠い位置にある、建設途中のビルが立ち並ぶ産業区画。

マミはソウルジェム片手に何かを探るように慎重に歩いていた。

昨日マミの部屋にて本来行われるべきだった魔女や自身の説明。結局何も話す事無く別れてしまったので、マミはテレパスを使いまどかとさやかを昼休みに屋上へと呼んだ。昼食を食べながら、マミは簡単に説明を終わらすと、実際見たほうが分かり易いということで放課後に魔法少女としての活動を見学すれば言いと提案して現在に至る。

魔女退治、ということは魔女の結界に入っていくことになり当然危険が伴う。だが二人の魔法少女予備軍はマミがいるからという信頼の下、マミに同行することにしたのだった。

「っ」

「シロ？」

「な、なんか怒ってるよお」

急に犬が唸り声を上げ始めた。進行方向をじつと見据え、何かを警戒しているようにも見える。

「もしかしたら魔女の匂いでも嗅ぎ分けているのかしら？ 犬の嗅覚って鋭いらしいし」

『それはあるかも知れないね。魔女は呪いを生み出すと同時に瘴気も吐き出す。それを感じ取っているのかもしれない』

マミの肩に乗り、犬の四肢が届かない安全圏から言うキュウベエにまどかとさやかが感嘆の声を漏らす。

「うわあ、あんた益々凄い子だよねえ」

「ブリちゃん凄い」

「省略するのかよ……」

結局人名から魚の名前みたいになってしまったことに肩を落とす、さやかはどこか疲れた様子で息を吐く。

「とにかく、ここからは更に気を引き締めていくわよ」

マミはそんな二人の様子にも解さず、目を細め、やがて現れる魔法少女を見据えゆっくりと歩を進めていった。

「ここね」

「なんか、心なし禍々しい空気がするようね……」

「魔法の呪いが蔓延している影響ね。このまま放置していたら心の弱い人から餌食になっていくでしょうね」

三人と一匹が辿り着いたのは建設途中で放棄されたビル。計画が頓挫して幾ばくかの時が流れているようで、辺りには野草が生え虫の鳴き声が更に深く哀愁を漂わせている。

「うう、緊張してきた。シロ、あんたいきなり飛び出したりしないですよ？」

「わっつ」

マミの後ろに隠れるようにしてビルを見上げ、細い体を震わせるさやか。声にも張りが無い。そんなさやかを勇気付けるように犬は小気味良く吼えた。

ビルの中に入ると広いエントランスだった。正面には立派なカウンターが備え付けられており、ここが商社ビルとして使われる予定だったことが窺い知れた。

吹き抜けとなっている二階への階段。それを上りきったところに不吉な模様が描かれた壁が内装の配置を無視して立ちはだかっていた。

「さ、結界に入るわよ」

マミがソウルジェムを輝かせると魔法少女へと変身し、模様がそれに呼応したかのように鈍い光を放った。

結界内に入ると、そこはまるで塔だった。

どこまであるとも知れない螺旋階段が気が遠くなるほど上部へと続いている。そしてその遙か上空を蛸に羽が生えたような奇妙な生

き物が哨戒するように飛んでいた。あまり視力が良いわけではないらしく、階段を上るマミ達に気づいている様子はない。

「相変わらず不気味な場所よねえ。シロ、ちゃんと付いて来てる？」
「わんっ」

階段をしばらく上り続け、少し息が切れ始めたところでさやかが犬に声をかけると、犬は疲れた様子を微塵も見せず淡々と付いてきていた。

「はあ、あんたってやつば凄いわ」

「そうね、それに何故かいてくれるだけで安心感みたいなものがあるわね。鹿目さんは大丈夫？」

「はい。ちよつと怖いですけど、でも大丈夫です」

下を向けば目がくらむような高さ。まどかは極力それを視界に入れないように上だけを見ていた。

『もう少しで結界の最深部だよ。マミ、気を付けて』

キュウベえがその声をかけたのは、階段を上りきり一本の橋のようになった通路に差し掛かったときだった。その橋の対岸には大きな扉が待ち構えている。

「ええ、そう見たいね。どうやら盛大に私達を出迎えてくれてるみたいよ」

その橋を塞ぐ様に、先ほどの羽の生えた軟体生物　魔法の手下が飛翔していた。

「うわ、なんか一杯いるう」

「マミさあん」

「大丈夫。私の後ろに下がってて」

マミはマスキット銃を召喚すると、クレー射撃のように通路の端に現れた手下を撃ち抜き、落としていく。

一つ、二つと撃墜数を増やしていくと、手下は飛ぶ方向を変え、マミ達に体当たりをするかのように飛び込んできた。

「くっ!?!」

「うわわっ! こっちきたあ」

「ひゃ!? あ、あれ?」

さやか、まどか目掛けて飛んできた手下に、二人は目を瞑り身構えるがその衝撃が身体に届くことは無かった。うっすらと目を開けたまどかの視界に飛び込んできたのは、二人を守るように立ちはだかる犬の後姿。

犬は飛んでくる手下を身体全体で受け流し、時にその牙で切り裂き、その爪で引き裂く。そして犬の振り下ろした前脚が手下を踏み抜き、まどか達に向かってきていた全ての敵を退けたのだった。

「シロ!? あんた……」

『これは驚いた。まさか手下を倒す犬がいるなんて。マミ、どうやら後ろの心配はいらなさそうだ』

「全く、これじゃ未来の後輩に良いとこ見せられないじゃない……」
どこか楽しそうに言うキュウベえとは裏腹に、マミの口調は拗ねた様なものだった。

「あっ、元に戻った!」

手下が守っていた橋の対岸にあった扉。その中に鎮座していたのはやはり魔女だった。

マミはここからは自分の仕事とばかりに、小さな結界のようなものを魔法で作り上げまどか、さやか、そして犬をその中にいれ囲いを作った。そして魔女と一対一の戦いに挑み、まどか達の心配を他所に快勝を成し遂げたのだった。

「マミさん凄い!」

「わんっわんっ!」

そして勝利を分かち合うように褒め称える後輩達と犬だったが、マミの表情は静かだ。

「凄いのは私じゃなくてむしろこの子ね。本当に、不思議な子……」

マミは膝を付くとゆっくりと犬の顔を撫で、その黒い瞳を見つめる。普段は気の抜けた表情の犬だが、その目に浮かぶ芯の強さはどんなものよりも硬いものであることをマミは何となく感じ取っている。

た。

「わう？」

「シロ？ どこいくの？」

ふと、急に走り出した犬に全員が疑問符を抱いた。

犬は階段を下りると吹き抜けのエントランスへと行き、そこへ現れていた一人の人物へと駆け寄っていった。

「あ、ほむらちゃん……」

その人物、暁美ほむらは犬に気が付くと足を止め周囲を見渡した。「ん？ 妙ね。私たちに気付いていないのかしら？」

二階から見下ろすマミ達を見上げることもなく、ほむらは静かに声を上げた。

「……それ以上近付かないで」

「あう？」

ほむらまであと数メートルというところで犬は駆け寄るのを止めた。その様子は人間の言葉を理解しているようにも見えるし、何も考えていないようにも見えた。ほむらが少しスカートを押さえて警戒しているのを見て何か感じ取ったのかも知れなかった。

「もう昨日みたいなのはご免だわ。それにしても、魔女狩りに一般人に加えてペットまで連れてくるなんて……今回は随分と余裕があるわね」

誰に言うでもなく呟くほむら。その声は二階までは届かない。

「……不思議な犬。今まであなたなんて見たこと無いのに」

ほむらは座って見上げてきている犬に向かって少しづつ足を向け、その手が届く距離まで近付いた。そしてゆっくりとその手を犬の頭に寄せようとし、その直前で手を握り締めた。

「……クツ、私は何をしようとしていたのかし」

「くくく、見たわよ転校生！」

「っ！？」

いつの間にか階下にいたさやかが、探偵物の主人公のようにほむらを指差し声高らかに対峙していた。さやかはどこか楽しそうだった。

た。

「今更取り繕ったってそうはいかないわよ！ このさやかちゃんア
イはちゃあんと見てたんですからね！」

さやかはそう言っていると犬に抱きつき、その毛並みを思う存分に撫で
回す。

「ふふふ、羨ましかろう羨ましかろう！ この毛並み、もっふもふ
よ？ あんたも触ってみたいんじゃないのお？」

犬と同じ目線でほむらを見上げるさやか。犬も面白がってか、さ
やかに続き「あう？」と首を傾げる。

「馬鹿な事を言わないで。私はそんな下品な獣に興味はないわ」

「またまたあ、強がっちゃって。さつき頭撫でようとしたくせに。」

あんた、ホントはシロが気になってあたしらの後付けてたんじゃな
いの？」

「ふざけないで！ 私はただ……」

「わう？」

「……う」

目を輝かせ、何かを期待するように真摯に見上げる犬に、ほむら
は一瞬だけ頬を緩ませてしまう。

それを見逃さなかったさやかは犬の前足を取り二本足で立たせ、
ほむらを招くような動作をさせる。

「ほおら。触りたくなある、触りたくなある」

「……っ！」

「あ、逃げた。ちえ、折角シロが触らせてあげるって言ってるのに。
可愛くないやつ！」

犬から手を離しふてくされるさやかを、二階から見下ろしていた
まどかとマミは苦笑いをするしか出来なかった。

「あっはは、さやかちゃん……。ほむらちゃん、仲良く出来るのか
な……」

「はあ、敵わないわね美樹さんにも、あの子にも」

マミはさやかから手を離されているにも関わらず、そのまま二本

足で器用に立ち手をこまねいている犬にやんわりと微笑むのだった。

続く！

この毛並み、もっふもふよ（後書き）

信仰無しのアマ公状態でもある程度は戦えると思うんだ。魔女は無
理っぽいけど。

アマ公の力が戻ることを祈って

（人）

ふかふか（前書き）

本来ならこの三話がお菓子の魔女戦だったわけですが、本編のコンビしてても面白くないかなあ、ということを入れて閑話休題。のもりでしたが普通に長くなったのでこれが三話で。

アマ公が関わった事で各人間関係に影響が出てきます。そんな話

今回もふつかふかにしてやんよ！

ふかふか

『もしもし、まどか？』

『うん、どうしたのさやかちゃん？』

日もすっかり暮れ、夕食の後自室のベッドに転んでいたまどかにさやかから電話が掛かってきた。夜に電話が掛かってくるのは珍しく、まどかは不思議そうな面持ちで通話ボタンを押すと、少し慌てた雰囲気なさやかの声が聞こえてきた。

『いきなりゴメン。どうしてもまどかにも伝えたくて』

『ど、どうしたの？ 何があったの？』

『さっき、マミさんから連絡があつて、部屋に帰ってみたらシロがいなくなっちゃってたつて』

『ええ！？』

この日、マミから魔法少女体験の誘いは無かった。普段なら昼休みに約束をし、放課後マミがいったん家に帰ってから集まっていたのだが、今日はマミからの断りの連絡があつただけで魔女狩りに出かけることはなかった。

『マミさん、ずっと探してるらしいけど全然見つからないみたい。』

それで出来ればまどかにも探すの手伝って欲しいんだ』

『う、うん。わかつた。すぐ行くね』

『ありがとう。あたし、家の前で待つてるね』

まどかは電話を切ると服を着替え、鏡を見てリボンをセットすると部屋を出た。一階に降りるとダイニングでまどかの母親の詢子が酒を嗜んでいた。

「ん、まどか？ こんな時間にどこいくんだ？」

まどかに気付いた詢子は出かける準備をしている我が子をいぶかしみ呼び止める。

「あ、ママ。あのね、先輩が飼ってたわんちゃんがなくなっちゃったつて。それで一緒に探して欲しいつて言われたの」

「そんなの警察に任せときな。探すにしてももう遅いから明日にしとき」

「だ、ダメだよ。大切なお友達なの」

どこか真剣な眼差し。それを見て何かを察した詢子は小さく息を吐くと手をヒラヒラと振った。

「……ふう、わかったよ。行つてきな」

「うん！ ありがとうママ！」

「あんまり遅くならないうちに帰ってこいよ。無理は禁物だ」
「うん。じゃいつてくるね」

まどかの後姿を見送った詢子は少し寂しそうな目をしてグラスのウイスキーを一口呑む。

「……全く。いつの間にあんな行動力がついたやら」

グラスを傾けると、中の氷がぶつかりカランと音を立てる。少しずつ形を変えていくその氷を眺め、詢子は一人ごちた。

まどかが家を出て程なくしてさやかの住むマンションに着いたとき、さやかがマンションの入り口付近で待っていた。さやかはすでにシャワーを済ませているようで、髪はしっとり濡れ、その頬はほんのりと赤く火照っている。

「さやかちゃん」

「まどか、ゴメンね遅くに。ママ怒ってたでしょ？」

「ううん。そんなことないよ。あ、でも無理は禁物だっていったよっ」

「あはは、ママさんらしいや。じゃ行こう。ママさんも待ってるし」
「うん」

さやかはまどかの手を取ると、マミとの待ち合わせ場所である公園へと小走りで向かっていった。

「シロ」。全く、一体どれだけ心配かけさせたら気が済むのよ」

さやかは犬を呼ぶ声が夜の公園に吸い込まれていく。少し風が出てきたのか、木々がざわめき空気が唸り声を上げる。その音にほんの僅か体を強張らせるが、自分を奮い立たせるように声を上げ続けている。

「美樹さんごめんさいね。手伝わせちゃって」

そんな様子を見てママが申し訳なさそうに謝っていた。ママは制服姿のまま。下校してそのまま犬を探しているようだった。

「なーに言ってるんですかママさん。あたしの方から手伝わせてくださいってお願いしたんですから。それに、シロが心配なのはあたしだって一緒なんですから」

「……うん、ありがとう」

ママがさやかに連絡を入れたのは、もしかしたら犬がそちらに行っているのではないかと僅かな期待を込めてのものだった。その小さな祈りが叶う事は無かったが、それを聞いたさやかが自分も捜索に加わると買って出たのだった。

「ねえキュウベえ。キュウベえの力で居場所が分かったりしないのかな？」

キュウベえもまた犬の捜索に加わっていた。だが、その雰囲気はお世辞にも乗り気といえるものではなく、しぶしぶママに付いて来たといったものだ。

『まどか、君は僕の力を勘違いしてないかい？ 僕にそんな便利な力なんてないんだよ。ま、もっともまどかが契約さえしてくれたら簡単に見つけられるんだけどね』

だが、どんな時でも仕事を忘れないあたりはプロの業に近かった。

「え、本当？」

「ちょ、こらキュウベえ！ あんたなんつー願いでまどかと契約しようとしてるよの！ まどかもまどかよ。そんな簡単に契約しようとしてないの！」

「あう、ごめん」

さやかに一喝されしよぼくれるまどかに、ママが「まあまあ」と

なだめていた。

「それにしても、ホントどこいつちゃったんだろっ？ マミさん、どこかシロがいそうなところとかわかりませんか？」

幾ばくかの時間が流れ、さやかの方が身体が湯冷めしてきた頃、草むらを食べい入るようにして眺めていたマミに心当たりを訊いた。

「ごめんなさい。私も全然分からないの。あの子がいそうところなんて見当もつかない」

まだマミと犬が出会ってからは数日しか経っていない。その上連れて出た場所は魔女退治の時のビルだけ。散歩らしい散歩もしておらず、どこが犬のお気に入りなのかを把握するような時間は無かった。

「うう、手がかり無しかあ。こりゃしらみつぶしに歩くしかないかあ」

さやかはその答えに長期戦も覚悟していたが、それを一蹴するよに静かな声が届いてきた。

「その必要はないわ」

静寂の夜。その闇に紛れるようにしてほむらが髪をかき上げながら現れた。

「うわっ！ 転校生！？」

「ほむらちゃん！」

「曉美、さん？ どうしてここに？」

ほむらはゆっくりとマミ達に近づくとある程度の距離を保った場所です。するとその後ろからひょっこりと白い影が姿を見せた。

「わう！」

「あつ、シロ！」

白い影はさやかに駆け寄るとその顔を一舐めし、嬉しそうに尻尾を振る。

「ほんとだあ！ ほむらちゃんが見つけてくれたの？」

「いいえ。そういうわけではないわ。たまたまよ」

直立不動のまま姿勢を崩そうとはしないほむらに、さやかが声を上げるがそれにいやらしい響きは無い。

「くう、すかしちゃってえ！ あんた何いいとこ独り占めしようとしてんのよお！」

「別にそういつつもりもないわ。私としても早くあなた達に引き渡したかったから丁度良かっただけよ。それじゃ」

口早に用件だけを伝えると、ほむらは踵を返し再度闇の中へ溶け込もうとしていた。その背中をマミが呼び止める。

「あ、待って暁美さん！」

「……………何かしら？」

一応足は止めたが向き直ることはなく、ほんの少しだけ顔を向けただけのほむらにマミは言う。

「あなたにはまだキュウベえを何故襲ったのかとか訊きたい事はあるのだけど……………」

膝を折り犬と視線を合わせ、その横顔をやさしく撫でる。気持ち良さそうに唸る犬に微笑み、マミはほむらにやわらかくお礼を言った。

「この子も私の大切なお友達なの。だから、見つけてくれてありがとう。」

「……………そう」

ほむらの返事は素っ気無いものだったが、マミはそれに満足したのか薄く笑い小さく頷いた。だが、さやかはそれを気に入らなかった様子でほむらに食って掛かる。

「こら、転校生。折角マミさんがお礼言ってるんだからもっと気の利いたこといいなさいよ」

「暁美ほむらよ。私の名前は転校生ではないわ」

「んなことしってるっつーの」

ほむらはそれ以上さやかに答えることはなく、その場を離れた。た。

「ほむらちゃん」

「鹿目まどか。貴女もいつまでも出歩いていないでさっさと家に帰ることね」

そう最期に告げると、ほむらの影は完全に見えなくなり、ただ風だけが唸っていた。

「……あんたはまどかのママかつっの」

「ふふ、あれはきつと彼女なりの気遣いなよ」

「まあ、マミさんがそういうならいいですけど。それより、こらし口！ あんたこんな時間までどこほつつき歩いてたのよ!？」

「クウーン……」

耳が垂れ悲しそうな声を上げる犬にまどかが慌てて助け舟に入る。

「さ、さやかちゃん。もういいじゃない。無事に見つかったんだし」

「はあ、まどかあんたは甘いねえ。そんなんじゃシロになめられちゃうわよ？ 犬はランク付けするんだから、気をつけないとあんたシロより格下に思われるわよ？」

「ええ、そんなのやだあ」

「ふふ、大丈夫よ。この子はそんなことしたりしないわ。さ、もう遅いし帰りましょう。こんな時間まで付き合ってくれて二人ともありがとう」

「そんな、全然大丈夫ですよ！」

「うん、見つかってよかったですね、マミさん！」

「ええ、これもきつとあなた達のおかげだわ。さ、送っていくからいきましょ」

マミはそう言うと二人の後輩を優雅にエスコートして各家まで送り届けて行った。その道すがら、マミが「首輪でも買おうかしら……」と呟き誰もそれに反論したりはしなかったが、そこに書く名前をどうするかでやっぱり揉める三人なのであった。

当然、犬の意見は入らない。当たり前だが犬は喋れない。それは仕方のないことだった。

さて、話は少し遡って、犬の行方がわからなくなった放課後のこ
と。

「……」

「わんっ」

ほむらが一人で自宅のアパートに戻つてくると、その部屋の前に
白い物体が尻尾を振りながら待ち構えていた。

「何故、あなたがいるのかしら？」

「あう？」

何故そんなことを言うのかわからないといった感じで首を傾げて
いる犬。まるでここにいるのが当たり前のような風貌だ。

「ここは私の部屋よ。あなたの飼い主の家じゃないわ」

ほむらはそれだけ言うと玄関の鍵を開け扉を引いた。すると、犬
がスルリとその隙間から部屋の中へ入って行ってしまった。

「ちよつと、何勝手に上がってるのよ！」

「わんわんっ」

ほむらは慌てて靴を脱ぐと犬を捕まえようと腕を広げるが、それ
をあっさりかわした犬は好き勝手に部屋の中を走り回った。

「待ちなさい、もう！」

犬は面白がつて逃げ回るが、マミの部屋ほど広くないここではさ
ほど動き回るスペースはなく、結局ほむらの腕の中に捕らえられて
しまった。

「ふう、捕まえた。一体何がしたいのよあなたは……」

やや散らかった部屋と若干乱れた長い髪。そして捕まえた犬から
は太陽の香りがほんのりと漂ってきていた。

「……ふかふか」

その白い毛皮に顔の半分を埋め、目を閉じてその感触を堪能して
いたが、ふと我に返った。

「……ハッ！ クツ、私は何をしているのかしら」

腕を伸ばし犬の体を引き離すと、少し紅潮した顔で犬を睨み付け
るが、

「あつ?」

「……………まあ、少しくらいならいいわよね?」

結局その感触に負け、再度犬の体を抱きしめてしまっほむらだった。

「で、あなたはいつになったら飼い主のところに戻るのかしら?」

「わつ?」

しばらく経って、一向に離れようとしない犬に流石に呆れて問いかける。だが、それを理解しているような顔つきは見せず、ただ口を半開きにした顔で不思議そうに唸るだけだった。

「はあ、いい加減探していることでしょうね」

ほむらは立ち上がると玄関に向かい靴を履き扉を開ける。

「ほら、いくわよ」

「わんつ」

そして散歩にでも行くような軽さでアパートを出て行ったのであった。

次の日。良く晴れた空は天高く澄み渡り、どこまでも蒼かった。

通学路となつている並木道には多くの生徒達が徒党を組んで歩いており、そして幾つかのグループに分かれていた。

そんな一つのグループが、前に行く髪の長い少女に声をかけた。

「あ、ほむらちゃん。おはよう」

「……………」

「こら、まどかが挨拶してるんだからちゃんと返しなさいよ、ほむ

ら

「……………おはよう」

「ん、良く聞こえないなあ」

「……………」

「あ、こらちよつと。待ちなさいよ」

「何？　あまり私に関わってほしくないのだけれど」
「ふん、今更そんなすかしたって無駄よ。あたしにはちゃんとわかってんですからね。あんたが昨日シロをかくまっていたことをね！」
「……何を言い出すかと思えば。思い込みもそこまでくれば上等ね」
「ふん。そんなこといつちやうんだ。じゃ、あんたのこの背中に付いた真つ白い毛は一体誰のもののかしらねえ？」
「　　っ！？」

「くくく、本性を見せたわね？　さあ、白状しなさい。今なら帰りの喫茶店でパフェ奢ってもらうくらいで勘弁してあげるわって、まどかが言ってたわよ！」

「さ、さやかちゃん。もう、そんなこといわなくていいよあ」

「……否定はしないのね」

「ん、何か言った？」

「別になんでもないわ」

当たり前のようにまどか達のグループに入り肩を並べて学校へ向かう。その姿はどこにでもある風景の一部に過ぎず、特にこれといつて珍しいものではない。

ただ太陽だけがその様子をやさしく照らしているのだった。

続く！

ふかふか（後書き）

アマ公のポアっとした雰囲気により人間関係が改善されていくお話。

ある意味このシリーズを象徴する話みたいになりました。

ああ、ちなみに仁美は出しませんでした。話がややこしくなるの

で（・A、）

（人）アマ公頑張れ

オイラがいねエと何にも出来ねエんだな（前書き）

長いです。これだけで一日かかりました。

ちなみに、前半と後半で力入れようが違うのは仕様です

今回後半から書き始めました。用は力尽きました（・A・）

ちなみにタイトルからネタバレ臭がぶんぶんしてますが、キニシナイでね！

オイラがいねェと何にも出来ねェんだな

「あー、まどか。帰りに病院寄ってもいいかな？」

「上条くん？ うん、いいよ」

放課後。いつものように一緒に下校しているさやかとまどかだが、この日は向かう方向が別だった。

「ここんとこずっとバタバタしてて中々顔を見にいけなかったからさあ」

「えへへ、そうだね。きつとさやかちゃん見たら元気ですよ」

「そ、そうかな？ あはは、だったら嬉しいな」

そう照れくさそうに笑い、さやかはまどかと共に町の病院へと足を向けていた。

「あ、ほむらちゃんだ」

その途中にある公園。そこに晧美ほむらが背中を向けて立っていた。その脇からは白い犬が見えている。

「ホントだ。あれ、シロも一緒だ。おーい、ほむら」

「……そんな大きな声出さなくても聞こえているわ」

「わんっ」

ほむらはまどか達に向き直ると髪をかき上げ、犬は元気よく吼えさやかに突進するように飛び込んだ。

「ほむらちゃんのお家ってこっちの方なの？」

「いいえ。そういうわけではないわ。たまたまよ」

「またまた」。そういつて本当はシロと遊びたかっただけなんじゃないの？」

「……」

沈黙。ほむらはどこか悔しそうな顔をしている。とっさに隠したが、足元においてある鞆からはソフトボールが覗いていた。

「あ、あれ？ もしかして凶星？」

「ほむらちゃんって犬好きなんだね」

「……そうね。嫌いではないわ」

平静を装い鞆を拾い上げチャックを閉める。それを見た犬は少し悲しそうな声を上げていた。

「ふくん。な〜んだ、あんた結構可愛いところあるじゃん。あ、でもここにシロがいるって事はまたマミさん探してるんじゃないか……?」

「バミミならさっきそこで逢ったわ」

「え、そうなの?」

「このあたりで魔女の痕跡を見つけたから少し搜索するそうよ。その際にこの犬の世話を任されたわ」

ほむらは「面倒なことを押し付けられたわ」と愚痴を零しているが、それが本心でないことは誰の目にも明らかだった。

「うわあ、また魔女かあ。マミさん休む暇ないなあ」

「ほむらちゃんも魔女をやっつけに行くの?」

「……そうね。今回はかりはそのの方が良さそうね」
遠くを見るようにそういうほむらにさやか達は不思議そうな表情になる。

「今回ばかりはって、それどういうことよ?」

「わんっ」

「あ!」

「こら、シロ! どこ行くのよもう!」

だがそのことを聞く前に犬が急に走り出し、公園から出て行ってしまった。

「病院の方角へ行っているみたいね」

「そんなの見たら分かるっての。もう、ほら行くわよ!」

さやか達もそれを追い、病院へと走るのだった。

「わん、わんっ」

「こらシロ! 病院前ではしゃいじゃダメでしょ?」

ようやく追いついたさやかか犬を叱りその額を軽く叩く。悲しそ

うな声を上げる犬に若干の罪悪感を感じるが、これも教育だと自分を納得させた。

「ん？ あれ何だろ？」

「どしたのまどか？」

そんな様子を微笑ましく見ていたまどかが、病院の柱に刺さっている何かに気が付いた。

「ほら、これ。柱のところにある……」

「近付いては駄目！」

「え！？ ほむらちゃん？」

「それに近付かないで。離れなさい、まどか」

少し遅れて追いついたほむらが険しい剣幕でまどかに警告をする。

「ちよ、まどか。その黒いヤツってまさか？」

「グリーンフシード……！」

「ええ！？ そんな、どうしてこんなところに!？」

病院の柱に刺さっていた小さな宝石　グリーンフシードは西日を浴び鈍い光を発していた。

「とにかく今は下手に刺激しない方がいいわ。あなた達はこの場からすぐに離れなさい」

「で、でもほむらちゃんはどうするの？」

「私のやるべきことは一つよ。さあ早くここから逃げなさい。結界が出来上がってからでは遅いわよ」

「え、でも……」

そんなやり取りをしていると、犬がトコトコとグリーンフシードに近づき、あるうことかそれをパクツと啜えてしまった。

「あ」

「え？」

「ちよ！」

「シロ！？ あんた何して、ってこらあ！ それ啜えたまま逃げるなあー！」

来た道を逆送するようにあっという間に駆けていってしまつ犬に

呆気にとられてしまおうが、すぐにさやかが我に振り返り怒鳴り声を上げる。だが犬が止まる様子はなくどんどん視界の彼方へと走っていく。「くっ！ 何を考えているのよあの子は！」

ほむらは迷う事無く追いかけてまどか達を置き去りにしていった。

「ほむらちゃん！ ど、どうしよう。このままじゃ危ないよ！」

「とにかくあたしはママさんに連絡入れるから！ まどかはシロを追いかけて！」

「う、うん。わかった！」

「何て足の速さなの。このままじゃ追いつけない」

ほむらの身体能力は魔法により強化されてはいるが、それでも普通より上といった程度のもの。全力で駆ける犬に敵うはずもなくその差は開く一方だった。

このままでは見失ってしまうと、ほむらはソウルジェムを取り出し変身する。

「よし、これで」

そういった直後、世界から音が消えた。

走っていた犬はその体勢のまま固まり、弧を描いて飛んでいた鳥は絵画の一部のように空に張り付いている。

その状態のまま犬に追いつくと正面に回りこんで手を伸ばした。

「全く、余計な手間を取らせてくれたわね。でもまあ、まどかから引き離してくれたことは感謝するべきかしらね」

そうしてグリーンフィードを取ろうとしたその時、止まっているはずの時の中、犬は表を上げほむらと目が合ったのだ。

「え？ 嘘……」

放心していたのは一瞬。だがその一瞬で時間停止の能力が切れてしまい、犬はほむらの脇を駆け抜け、少し先で止まり振り返る。

「ほむらちゃん！」

そして頭を振り再度犬を捕まえようとしたところでまどかが追いついてきた。

「まどか！？ くっ、しまった！」

「あ！」

前方の犬と後方のまどか。その両方に気を取られた瞬間。グリーンフシードが輝き、結界が形成されてしまった。

そこは不思議な空間だった。

おとぎの世界のお菓子のような場所。

そんな場所で気が付いた犬は、どこからかすすり泣く声を聞いた。

その声を頼りに進んでいると、一際大きな部屋へたどり着いた。

その奥で一体の人形が寂しそうに横たわっていた。

犬はその人形に近付くと、それが鳴き声をあげていた正体だと気付いた。

慰めるようにその体を舐めてあげる犬。

その犬に人形の思念が届いた。

それは希望の祈り。

それは絶望の嘆き。

それは悲痛な叫び。

救いを求めるように全てを呪う様に。

人形はただひたすら泣いていた。

犬はそんな人形を尻尾で優しく撫でると円を描くようにその人形の体をなぞる。

だが、何も起こることはなく、ただただ柔らかい毛が人形をくすぐるだけだった。

犬は天を仰ぎ遠吠えを上げる。

だがそれはどこにも届く事無く寂しく響き渡るだけだった。

「まどか、大丈夫？」

「う、うん。ほむらちゃんごめん……」

ほむらとまどかは同じ位置に飛ばされていた。結界が形成される直前にほむらがまどかの身体を掴んでいた為だ。

「あなたが無事ならそれでいいわ。さ、早くここから出ましょう」

「え、でもまだ……」

「あの犬なら大丈夫よ。まだ完全にグリーンフシードが孵化しているわけではないから魔女に襲われる心配はないわ」

ほむらは口早に言うともどかの手を取り進もうとする。だがまどかの足は動かない。

「じゃあ、あたし達が外に出ている間にもし孵化しちゃったらどうなるの？」

「……」

「だ、ダメだよそんなの！ 絶対ダメ！ ねえお願いほむらちゃん。あたしの事は後でいいから先に……」

「それは出来ないわ。貴女の安全が最優先よ」

「ほむらちゃん！」

ほむらはまどかに向き直りその肩を掴む。

「まどか、お願いだから私の言うことを聞いて。私は貴女を守りたいだけなの」

突如、地面が揺れ立っていられないほどの振動が二人を襲う。

「っ！」

「もう孵化まで時間がない。このままだと……」

「ねえほむらちゃん」

「何かしら？」

「ほむらちゃんはあたしを守ってくれるんだよね？ 絶対あたしを見捨てたりはしないよね？」

「当たり前よ。私はそのためだけにこの力を使っているわ。何かあるうとも貴女を守ってみせる。そう誓ったわ」

「うん」

ほむらの目を真っ直ぐに見つめるまどか。その瞳には強い意志の色が見て取れた。

「……ほむらちゃん、あたしシロちゃん探しに行く」

「まどか!？」

「だから、そんなあたしのこと守ってね。信じてるから」

まどかはほむらの手を取ると恥ずかしそうにそう言った。ほむらは顔をそむけると素っ気無く一言だけ言った。

「勝手にしなさいっ」

「えへへ、ありがとうほむらちゃん」

「まどか。出来るだけ私の左側にいなさい」

「え?」

「……空薬莢が当たってやけどをしたらいけないから」

ほむらはそういうと左腕にある盾のような装備の内側から一丁の拳銃 ベレッタM92を取り出し、現在の状況を冷静に見極めた。現在地は通路のようで前方と後方に向かって薄暗い道が伸びている。道中にはお菓子を模したオブジェクトが乱立しており、また壁もまるでケーキのスポンジのような模様だ。実際触ってみるとそれは硬く食べられるようなものではないことが分かった。おそらくお菓子のオブジェクトもまたこの9mmパラベラム弾が貫通するようなものではなさそうだ。

ほむらはまずソウルジェムを取り出しその明度を確認する。そして前方に進み、その輝きが増していったことを見て取ると手招きをしまどかを呼び寄せる。

通路をしばらく進んでいくと小さな物体 サッカーボール大の眼球に手足が生えたような小型の手下が列を組んで歩いているのが見えた。ほむらは手近なオブジェクトにまどかと共に身を隠し様子を見る。

「まだこちらに気付いている様子はないわね」

おそらく視力が低いそれはまるで何かを探すように手探りで歩いており、どうやら慎重に歩けば気付かれずにすみそうだった。

勿論殲滅しながら行けば早いのだが、まどかという守るべき対象

があり、尚且つほむらの手持ちの弾丸に限りがあることから出来れば魔女まで弾を節約しながら進みたいところだった。

ほむら達はその手下が自分たちの足元を歩いて通り過ぎるまでやり過ぎし、歩を進めた。

しばらく進んでいくと人が通れるくらいの扉があり、そこに入るとドーム上の広い部屋に出た。シュークリームのようなそこには甘い香りが漂っており、また手下も多く徘徊していた。奥側には入っていたのと同じような扉が据え付けられている。そこへ向かうまでに身を隠せる場所がなく、手下達を倒していく必要があるそうだった。

手下の数はおよそ二十。十五発装填式のベレッタM92では一度以上のリロードが必要になる。

「まどか、耳をしつかり塞いでなさい」

「う、うん」

まどかが指示通りに耳を塞ぎ終えた後、ほむらは盾に魔力を込め、時を止めた。

そこは静寂の世界。

自身の動悸がはつきりと聞こえるくらい他の音は何一つ存在していない。

ほむらは視界に映る手下に向けて順番に照準を合わせ、何の迷いもなくトリガーを引いていく。音もなく銃口から飛び出した銃弾がピタリと空中で静止する。

ほむらの時間停止の影響範囲外は自身と触れているものに限られる。そのため放たれた弾丸はほむらの範囲外から出たところで時間停止の影響を受け、止まる。音もまた同様だった。銃弾と共に吐き出された衝撃波となった音もほむらの耳に届く前に止まるのだった。

一度全ての弾丸を撃ち尽くした後、弾倉を抜き、盾から取り出した全弾装填されたものにリロードし、更に撃つ。合計二十発撃つたところで再度弾倉を抜くと9mmパラベラム弾のカートリッジを取り出すと一つ一つ丁寧に二つの弾倉に詰め込んだ。そして耳を硬く

塞ぐと、時間停止を解除した。

天を貫くような轟音がドーム上の部屋に鳴り響いた。

本来なら乾いた音を出す程度だが、それが二十発同時となると最早爆弾が炸裂したような音になり代わる。

未だ腹部に響き、硬く塞いだ耳まで届いた落雷のような音が鳴り止んだとき、そこに動いている手下は存在していなかった。

「行くわよ」

端的に言い放つとほむらは正面の扉へと向かい、まどかは慌ててそれを追いかけた。

しばらく進んでいると薄暗い通路の向こうが三叉路になっているのが見えた。ほむらは腕を横に伸ばしまどかに静止の合図を送る。

「ほむらちゃん？」

「静かに」

慎重にその曲がり角まで壁沿いに歩き、端まで来たところで足を止める。息を吐き、手にした銃に力を込めると一息で飛び出し腕を水平に構える。

そのほむらの眼前に銃口が突きつけられた。

ほむらもまた照準を相手の眉間に瞬時に合わせている。

「……」

「……」

一瞬の緊張。

それは相手より発せられた言葉によって解かれたのだった。

「銃を下ろしてもらえると嬉しいのだけれど？」

「それはこちらのセリフね、バマミ？」

ほむらに銃口を突きつけている相手　バマミは肩の力を抜くと構えたマスケット銃を下ろし息を吐いた。

『間一髪だね。撃たれるかと思ったよ』

半ば以上本気で答えるキュウベえにマミは「同感だわ」と呟いた。

「まどか！」

「さやかちゃん！　良かったあ」

「マミに同行していたさやかが喜びの声をあげ、まどかとの再会を抱き合って分かち合う。」

「ふう、全く二人とも無茶すぎよ。でも曉美さんがいてくれて良かったわ。鹿目さんを守ってくれてありがとう。」

「礼になんて及ばないわ。それが私の使命だから。」

「ほむらちゃん……。」

髪をかき上げさも当然のように言っほむらにまどかから若干熱い視線が届いていた。

「ぐっ、ちよつとカツコイイじゃん。」

『安心するのはまだ早いよ。この奥に魔女が控えているんだから。』

「そうそう、早くシロを助けてあげないと。ったくもう、一体どれだけ心配かけたら気が済むのよあいつは！ あとでとっちめてやるんだからっ。」

拳を握り威勢よく言い放つさやかに続くように、マミが不吉な笑みを浮かべていた。

「ふふっ、そうね。後できついお仕置きしてあげなきゃ……。」

「マミさあん……。」

「目が笑ってないわね……。」

通路の先にあつた一際大きな扉。その先は巨大な空間となっていた。

野球場がすっぽりと入ってしまうくらいの範囲があり、その天井は暗がりで見えないが相当高いものであることは容易に想像できた。いくつかの足が異常に長い椅子が置いてあり、その上で寝ているかのように白い犬がいた。

「シロ！」

「まずいわね、もう魔女が活動している。」

「ひゃあ、何後ろからも一杯来てるよお！」

「まどか！」

開け放たれた扉の向こうから多数の蠢く影。通路を塞ぐほどの物

量が徐々に迫ってきていた。扉を閉めようとほむらが力を込めるが、びくともしない。

「何なのあいつ！　まるでシロの体から出てきてるみたいじゃない」
椅子の上で寝っ転がっている犬から伸びるように、一体の筒状の大きな魔女がほむら達を見下ろしていた。真っ黒い胴体に星が煌く様なカラフルな水玉が描かれている。その顔は対照的に白く、ポツプな色彩だ。

『きつと生命力を吸っているんだ。急がないとまずいことになる』
キュウベエの言葉通り、魔女の眼下の犬はすでに動き回るほどの体力はないらしく、僅かに身じろぎする程度しかしていない。

「暁美さん、後ろの守りは任せても良いかしら？　私の能力では大勢の敵と同時に戦うのに向いてないの」

マミは数丁のマスケット銃を召喚するとその内の一つを手に取り、魔女へ狙いを付ける。

同じ銃器とはいえ、多数召喚できるとしてもマミのマスケット銃は単発式だ。連射できるほむらには大量殲滅の点では劣る。そのことを熟知し、そして自分の役割を把握しているマミにはそれが当然の作戦だった。

そしてそれはほむらも同意見だった。

「分かったわ、でも気を付けなさい巴马ミ。あの魔女は今までのとは違うわ」

「ご忠告ありがとう。勿論油断なんてするつもりないわ。こんなところで倒れるわけにはいかないしねっ」

マミは魔女と犬の接合部分、わずかな隙間を縫うように射撃し切り離す。犬の保護と同時に、自由な活動を可能にしまった魔女に向けて大きく跳び、まどか達と距離を置く。

「さあ、かかって来なさい。穴あきチーズにしてあげるわっ！」

魔女は巨大な口を開け、その牙をマミに向ける。

「あら、私を食べる気？　あまり良い趣味とはいえないわねっ」

マミはそれを飛ぶ様にして回避し、すかさず銃弾を撃ちこんでい

った。

「数が多いわね。キリがないわ」

ほむらもまた盾から新たな銃器を取り出し迎撃に当たった。

取り出したのは凶悪なフォルムを持つMINIMI軽機関銃。5.56ミリNATO弾を用いる分隊支援火器だった。毎分千発にも及ぶ発射速度は羽虫が飛ぶ音を大きくしたような発砲音になる。

「うっわ……」

「ひえ……」

さやかもまどかもそのテレビの中でしか見たことがない兵器に目を奪われ開いた口が塞がらない。そんな様子を尻目に、ほむらは通路に群がる手下に向けて無慈悲に撃ち込んだ。

湯水のように流れる薬莖と止む事のない轟音に耳を塞いでいたまどかの足元に、小さな手下が潜り込み、そのフォークのような手で突いた。

「きゃ、いたっ!」

「このお、まどかから離れなさい!」

「くっ! いつの間に」

一度銃撃を止めMINIMIを置くとさやかが振り払おうとしている手下をけり飛ばす。そんなほむらの頭上からぱらぱらとまばらではあるが小型の手下が雨の様に降ってきていた。

「ちよっとほむら! しっかり守んなさいよ!」

「うるさいわね、少し黙ってなさいっ」

「きーっ、何なのさその態度! やっぱ可愛くないっ!」

「ほむらちゃん、あたしなら大丈夫だから!」

ほむらは一度先のベレッタM92に持ち帰ると時を止め、上空から降ってくる手下を全て撃ち落とすと再度MINIMIで通路の手下に向き直る。そこには最初に比べ数は減ったものの、どこから沸いてくるのか未だ無数の影がいた。

「数が多すぎる……!」

ほむらは力を込めなおすと通路を沿うように掃射し始めた。

「何て諦めの悪いっ！」

「ママもまた苦戦を強いられていた。」

高い椅子の上にバランスを崩すことなく仁王立ちし、数多ものマスケット銃でほむらに負けじと多数の銃弾を魔女に撃ち込んでいた。その遙か足元には数体の魔女。この魔女は何度倒れてもその口から生えてくるように新たな魔女が次々と湧いてきていた。

『バママ、そいつをいくら倒しても無駄。本体の人形がどこかにいるはずよ。それを叩きなさい！』

最早豆粒程度の大きさになるくらい離れたほむらからテレパスが届いた。そちらを見れば大量の火器を使い分け手下を蹴散らしている黒い魔法少女の姿があった。

「！ Okなるほどね、そういうことならっ！」

ママは一際高い椅子の上に鎮座している人形を見つけると、黒い魔女の牙をかいくぐり人形の真上まで到達した。

その人形が動く様子はないが、ママは細心の注意を払い、かつ即座にマスケット銃を人形の頭に向け発砲した。

ビクン、と一度跳ねると、魔女は椅子から転げ落ち、地面にぶつかり中の綿を飛び散らせた。

それと同時に、犬が目を覚ましたのか動き出すのがさやか達からも確認できた。

「シロ！」

「ママさんやったあ！」

「あとはこの大きいのを倒せば！」

ママはその場所ごと食いつこうとする魔女の牙を飛び越えると、魔力を集中させ巨大な砲身を出現させた。

「これで……とどめよ！」

そして空中でそれを爆音と共に放つと、人間大の弾丸が魔女の体を貫いた。

マミが勝利を確信したその瞬間だった。

魔女からは最期の力といわんばかりにもう一体の魔女が生まれて、反動で一瞬身動きが取れないマミの身体を食いちぎらんと口を大きく開いた。

「あ」

「マミさんっ！」

ほむらはまどか達に迫る手下で手一杯だった。

さやか of 悲痛な叫びが木霊し、マミの身体が魔女の口内に消えていこうとしたその時だった。

かろうじて動く体を酷使し、犬がマミへ渾身の体当たりをしたのだ。

マミの身体は弾かれる様にして魔女の凶牙から逃れたが、その代償として犬がいままさに食べられんとしていた。

そんな時だった。

「全く、お前はオイラがいねエと何にも出来ねェんだな、アマ公！」

そんな声が聞こえてきたと同時に、犬に向けて風が巻き起こった。それは小さな小さなものだったが、犬の位置をずらすには十分なものだった。

魔女の牙は犬から逸れ、空気を噛み潰したに過ぎなかった。

「ゴムマリ君。君はいつも美味しいところを持っていくね。狙ってやっているのかい？」

力なく落下していく犬の体躯を優しく受け止めたのは、まどか達でもなく、また先の言葉の主でもなかった。

「え、なに？ なんなの！？」

「説明はあとだよガール達」

「へへっ、勘が鈍ってんじゃねエかアマ公？ ポアっとしてねエでいっちょ気合を入れなおせってんだイ！」

犬を受け止めた人物　映画に出る陰陽師のような服装に身を包んだ若い男に小さな何か飛び移り、それは犬の頭上をぴよんぴよん跳ねながら人の言葉を発している。

犬はいつも以上に呆けた顔をしていたが、やがてさやか達も見たこともない勇ましいものへと変わり、自身を奮い立たせるように雄たけびを上げたのだった。

「倒した……の？」

そう誰かが呟いた。それくらいその光景は不思議なものだった。

すでに本体を倒され瀕死だったとはいえ、小さい虫のような生物から見えない刃によって一閃され、真つ二つに分かれた魔女が地面に落ちるより早く、陰陽師の男がその二欠片を更に細かく切り刻み、消滅させてしまったのだった。

「なんでエアマ公。おめエ筆しらべはどうしたんだア？」

「うん？　アマテラス君、どこいくんだい？」

頭上で跳ねる何かに『アマ公』と、また陰陽師の男に『アマテラス』と呼ばれた犬はひよこひよここと弱弱しく歩き、倒れている魔女の本体へと近付いた。

「くうくん」

そしてその体を一舐めすると、人形が淡く光り、それが消えたときその場所には一輪の花が咲いていた。

「魔女が……花になった？」

「あなた達は何者なのかしら？」

手下がいなくなり境界が崩れ元の風景へと戻ったとき、ほむらは使用していた兵器を全て盾に収納し変身するとき彼らに問いかけた。

「あアん？　エライ高圧的なねエちゃんだなア」

「まあまあゴムマリ君。小さいのはその体だけにしときなよ。兎にも角にもここは彼女達の世界だ。ミー達がここにいる理由は話さなくてならない。それに」

陰陽師の男はへたり込んでいるマミを指差すとほむらに向かい出来るだけ穏便な口調で言った。

「彼女をこのままにしておくわけにはいかないだろう?」

「マミさん、しっかりしてください!」

「わ、私は……大丈夫。大丈夫よ……」

マミは変身を解いているが、どこか安心しており、その足に力が入る様子がない。

「無理はしないほうがいいよ。死の恐怖はそう簡単に拭えるものではないからね」

陰陽師の男はとりあえず落ち着ける場所に移動しないかと提案し、それにマミがかすれるような声で自分の部屋を使えば言いと答えた。
一同は各々思いを胸に秘めたまま、とりあえず魔女を撃退できたことだけを喜び場所を変えていった。

誰もいなくなったその場所に一輪の花だけが風に吹かれて揺れているのだった。

続く!

オイラがいねェと何にも出来ねェんだな（後書き）

火薬少女あけみ ほむらでした（・・・）キリッ
や、正直頑張りすぎましたw

さて、ようやく出てきたイッスンとイズヒア。
なぜこちらに来たのかは次回ですね。

なので次回はほぼ説明回。そんなのノー サンキューって人はゴ
バツクだよ！

レッツ ロック スイビー！(前書き)

長いおマジブ……

時間のあるときに見てください。この話だけで1万5千文字ありま
つ。

その上説明回。あまり見所はないかもめ。

レック ロック ヘイビー！

『やいやいアマ公、全くオマエってヤツは何をやってたんでイ！』
「あうう」

『折角オイラがバシツと決めてやったつてエのに、何で食い物に釣られてナカツクニに降りてきてんだア？』

「くう〜ん」

『しかもオイラが開いた幽門扉にもいつの間にか巻き込まれてやがるしよオ。その上筆しらべも使えないときやがった。全く、オイラがいくら温厚な性格だとしてもこればかりは堪忍袋の緒が切れちまわア！』

びよんびよんと犬の鼻先の上で跳ね、犬に叱咤を飛ばしているのはイッスン。

人の目からは判別出来ない程度の大きさだが、辛うじて笠のようなものを被っている事が分かる。

「そういう割には随分嬉しそうだねゴムマリ君。ユーのほうこそいい加減素直になつたらどうなんだい？」

そうイッスンを諭すのは、現代の町並みの風景から完全にずれた、陰陽師のような格好をしたウシワカ。

一人と、いや、二人と一匹の犬は夕日が隠れようとしている町並みを当ても無く彷徨っていた。

『ケエー！ テメエは黙つてろイ！ 誰のせいでオイラ達が見た事もねエ町をうるつかなきやならねエと思ってるんだ！』

「やれやれ。ミーのせいだつて言うのかい？ ま、あながち間違つてはいないけどねえ」

「何よそれ。じゃああんた達はずっと過去の世界から来たっていう

の？」

「ザッツ ライト。その通りだよ。僕たちはユー達が生まれる遙か昔からやってきた。このゴムマリ君が勝手に開いてくれた幽門扉のせいだね」

幽門扉とは時空を超える事のできる古から伝わる特殊な装置だ。

そう付け加えて話すのは、先の魔女を撃退し、現在マミ宅に上がっているウシワカだった。

ウシワカ達は安心していたマミを抱えると、マミの勧めによって事情を話せる上にそれなりの人数を収容出来る場所としてマミの自室に集まっていた。

部屋まで帰るとマミも自分を取り戻したのか、人数分のケーキと紅茶を用意するとそれを忙しそうにテーブルへと運んでいった。そしてそれに手を付けながらウシワカが自身の事情を説明しだしたのだった。

『ケツ！ なアにが勝手にだィ。元はと言えばテメエが邪魔したから余計な力が入っちまったんだ』

ウシワカの説明が気に入らなかったのか、テーブルの上で飛び跳ね乱暴な口調で反論する。だがウシワカはそれに肩をすくめて溜息を吐くだけだった。

「ふう、全く君は本当にナンセンスだね。おこがましいにもほどがあるよ」

『んだとテメエ！』

濟んだ刃物の音。

小さいとはいえ、しっかりと腰に差した刀を抜きウシワカに突きつけるイッスン。にわかには不安な空気が流れるが、すかさずやかが止めに入った。

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ！ 何勝手にそつちで喧嘩はじめて

んのよ！」

『……ケツ』

『……ふう』

ほんの少しの間にらみ合いが続いていたが、どちらとも無く視線を外し、イツスは刀を納める。それを確認すると、いつもの調子を取り戻したマミが口を挟んだ。

「とりあえず聞きたいことがあるのだけれど、いいかしら？ えつと……」

「ウシワカ、そう呼んでくれて構わないよベイビィ」

軽いウインクと共にそういうウシワカに若干当てられながらも、マミは質問を続ける。

「え、ええ……。じゃあウシワカさん。まず、その小さい……人？ は一体何なのかしら？」

『やいやい姉ちゃん！ オイラは人じゃなくてイツスさまだい！ そのでっけエおっぱいに刻み込んでおくんだな。プヒヒヒ！』

小さいながらも良く通る声。まるで頭の中に直接聞こえてくるようなイツスの言葉に、マミは顔を赤らめ俯いてしまう。

「こらあこのチビ介！ あんたマミさんにいきなり何変な事言ってるのよ！ このセクハラ！」

『んだとテメエ！ おっぱいでけエことの何が悪いんでイ！』

「止めときなよゴムマリ君。どうやらこの時代でも女性の体格についてとやかく言うのは禁句らしい」

『んだそりゃア？ おっぱいでけエことがそんなにいけねエことなのかア？ ヤダヤダ、これだからおっぱいのちっちエヤツはいけねエやー！』

「だからおっぱいおっぱい連呼するなって言ってるでしょ！ あとあたしは小さくない！ 標準レベルよっ！」

テーブルに手を付きイツスを上から威圧するように身を乗り出して声を張り上げるさやか。その付いた手は微妙に内に入っており、ほんの少しではあるが自身の胸を張り出させている。さやかにとっては精一杯の自己主張だった。

「さ、さやかちゃん。もう止めようよお」

「いい加減にしなさい美樹さやか。恥ずかしいと思わないの？」

そんなさやかの様子に気付いたまどかは恥ずかしそうに、またほむらは冷静に紅茶を飲みながら注意を促す。

「が、イツスの一言でそれは辛くも崩れてしまった。

『なんでイ、おっぱいちゃちエヤツでも物分りがいいヤツがいるじやねエか』

「うう、気にしてるのにい」

まどかは沈み込んだように頭を垂れ、

「……………」

ほむらが手にしたカップからは不吉な音が静かに響く。その目は眼力だけで人が殺せるのではないかというほどのものだった。

『ウツ、何そんなに睨んでやがんでイ』

「そのあたりにしておきなよゴムマリ君。今はユーが悪い」

「えつと……………それじゃあ話を戻すけど、いいかしら……………」

何とか平静を取り戻したマミが皆をなだめる意味合いも込めて落ち着いた口調で言う。

「じゃあ、貴方達が通ってきたその幽門扉？ から、この子も一緒に来たというのかしら？」

言葉と共に指差すのは犬。

「その通りだよ。ユーは中々飲み込みが早いね」

ウシワカはマミの言葉に頷くと、犬をじっくりしむ様な目で見る。

「アマテラス君は元々ミーとタマガハラ、ああ空にある国とでも思ってくれたらいいよ。に渡ったんだけど、どうもそこにはアマテラス君の好みの食べ物が無かったらしくてね。ナカツクニ、今のこの大地に降りて来てしまったんだ」

思いをはせる様に天井を見上げるウシワカ。その目には憂いの色がある。

「空にある国とか、なんか御伽話みたいだけど……………」

信じがたい、というよりどこか憧れのようなニュアンスを含み、

さやかが続ける。

「まさにその通りさ。ミー達はユー達から見たら御伽や神話の世界の話の者達だ」

「じゃあ、シロもあんた達と一緒に神話の中からやってきたっていうの？」

『当たり前でエ。ここにいるアマ公こそお天道サマの神様、天照大神サマだア！』

まるでとある時代劇の付き人のように自信たっぷり犬を持ち上げるイツスンだったが、

「……………」

「……………」

「……………」

「……………このケーキがつついてるシロがカミサマ、ねえ……………」

肝心の犬は出されたケーキをあつという間に平らげ、ついでウシワカ、まどか、ほむら、マミの分まで食べてしまい、イツスのケーキに鼻をつけようとしたがイツスンに遮られ、仕方なく今度はさやかの分を狙うがそれは高く上げられたさやかの手によって防がれていて、必死にそれに食らいつこうと後ろ足立ちになりフラフラとしているところだった。

『……………』

「……………まあ、あれがアマテラス君のいいところだね」

「あつ？」

だらしなく涎をたらしながら一生懸命ケーキの匂いを嗅いでいるその姿には、どこにも神様としての威厳はなかった。

「さて、次はミーからも質問してもいいかな？」

ケーキを食べ終えマミ達からの質問が途絶えた頃、ウシワカがマミの了承を得た上で言った。

「ユー達が戦っていたアレは一体何なんだい？ 見たところ妖怪の

類とは違うみたいだったけど」

妖怪、という単語に一同は怪訝な表情を見せるが、それは仕方無い事だった。ウシワカ達が来たのはまだ妖怪が跋扈^{はつこ}し神様の存在が信じられていた時代。だが現代においては妖怪など世の噂話程度の成り下がり、神の存在も各宗教にとつて都合の良いものに置き換えられており、本来の意味での信仰はほぼなくなってしまった。マミ達もまたそういう時代を生きている少女であり、魔女と戦うという運命こそ課せられているが妖怪や神の存在を信じているわけではなかった。

「あれは魔女と呼ばれる存在よ」

「魔女？」

マミの回答に今度はウシワカが疑問の声を上げる。妖怪とは別の怪の類という存在に興味がある様子だ。

「そう、魔女。形のない悪意として人間を内側から蝕んでいく私達の敵よ」

「へえ、その割にははつきりとミー達にも見えていたけど」

「あれは結界の中だからよ。魔女は普段結界に隠れ住んでいて、普通の人には存在すら感じられないの」

「なるほどね。ミー達はアマテラス君の気配を辿っているうちにその結界に紛れ込んでしまったって訳か」

ウシワカは大きく頷くと近くで寝そべっている犬の白い毛並みを撫でる。満足そうに尻尾を横に振るその姿は完全に懐いた飼い犬の姿。

その姿に若干の寂しさを込めた視線を送っていたウシワカは質問を続ける。

「それでは魔女と戦っているユー達はなんと呼べばいいんだい？」

「私達は魔女を倒すもの 魔法少女と呼ばれる存在よ」

キユウベえと契約し、願いを叶える事と引き換えにその運命に縛られる存在。そう付け加えたマミだったが、ウシワカの反応は予想とは違ったものだった。

「ああ、なるほどね。だから”魔女”か
その予想外の反応にマミは疑念を抱く。

「何が言いたいのか？」

「ん？ ユー達は何も知らないのかい？」

だがウシワカは逆に何故その様な疑問を持つのが分からなかった。何故なら、

「ユー達魔法少女が成長したらあの魔女になるんじゃないのかい？」
ウシワカには見えていたからだ。魔女と魔法少女が根っこでは同じ存在であることを。

「……！」

「馬鹿なこと言わないで！」

すぐに動きを見せたのはほむらとさやか。ほむらは息をつまらせると驚愕の表情を、さやかは怒りに満ちたものをそれぞれ見せた。

「何を怒っているだい？ ユー達の力とあの魔女の力は同じものだった。即ちそれはユー達はあの魔女と同じ存在ということだろう？」
ウシワカにとって理解出来ないのは、その力を得る代償にそうなる運命だということを何故この少女達は把握していないのかということだった。何かを得るためにはその代価を支払わなくてはいけない。ウシワカにとってそれは当たり前前の事だった。

「いい加減にしなさいよ、あんた！ マミさんをあんな魔女なんかと一緒にしないで！」

だが、さやか達もまたそれとは別の思惑がある。そもそも異形のものや戦わなくてはいけない運命という時点で、現代社会に生きる少女より遥かに過酷な人生なのだ。そのことと引き換えに力を得るものだと思っていたし、何よりキュウベえからはそう聞かされていたのだ。

「キュウベえも何か言いなさいよ！ こういう説明ならあんたのほうで得意でしょう！」

そのキュウベえに反論を求めるが、キュウベえは単調な口ぶりでこう言ったのだった。

「いやはや。まさかいきなり確信を喋ってくれるとは思わなかった。よく分かったね。驚いたよ」

「キュウベえ……？」

「別に不思議に思う事じゃないだろう？ 僕たちはいずれ魔女になる君達を”魔法少女”と呼んでいるだけなんだし。勝手に勘違いしているのは君達のほうなんだから」

キュウベえにとってはまたそれは当たり前のこと。幾度となく契約を繰り返してきた彼にとって魔法少女とはただの消耗品にしか思っていないのだ。勿論、それを素直に伝える事などしない。

「あんた……あんた何言ってるのよ！ あたし達に説明したときにはそんなこと一言もいってなかったじゃない！」

「そりゃそうだよ。だって聞かれなかったからね。言う必要のない事まで伝える義務はないだろう？」

その答えに誰もが口を塞いだ。正論だから、ではなくそもそも自分達の意見が初めからキュウベえに届いていない。そのことを誰とも無く理解してしまったからだ。

「キュウベえ、一つだけ教えて……」

「ママが重たくなってしまった口をようやくと聞いた感じで聞く。」

この場にいる誰よりもショックを受けているのが彼女だった。

「なんだいママ？」

「貴方は、私の友達じゃなかったの……？」

「ママにとってキュウベえはたった一つ信じられる存在だった。家族を失い、周囲から腫れ物扱いされながらも気丈に生きてこられたのは、使命を信じて戦ってきたからこそだった。だがそれが今まさに崩れ去ろうとしていた。」

「君がそう思っているなら僕たちはいつだってそうなりえるよ。最も、君たち人間同士のような関係ではなく、あくまでも搾取する側とされる側でしかないけどね」

「っ！」

その砂上の楼閣にとどめの一言を放ってしまったキュウベえに、

マミは即座に変身するとマスケツト銃を突き付けた。

「マミさん!？」

だが、

「……………う? あ、うう……………」

「マミさん!？ 大丈夫ですか!？」

マミは変身をするや否やその胃から逆流するような不快感を覚え銃を落とす。その手は小刻みに震え、視点は定まっていけない。

『やれやれ、これだから短絡的感情を持つ人間は。少しの間距離を置く事にするよ。そう何度も殺されちゃたまらないからね』

その隙を突き、キユウベえは煙のようにこの場から去っていった。後に残されたのは後味の悪い雰囲気と苦しそうなマミ。

『……………ケエー、なんなんだアイツはア。いけすかねエ野郎だぜイ』

「ゴムマリ君、今はそれどころではなさそうだよ」

「いけない、ソウルジエムが濁りだして……………! バマミ、今すぐに変身を解きなさい」

それに気づいたのはほむらだった。マミの髪飾りについているソウルジエム。それが見る見る内に黒く染まり始めているのだ。

その言葉に従い変身を解く、というより集中が切れて自然に解けたといったほうが正しい。何にせよ、マミはまた見滝原中学の制服姿に戻った。

「マミさん……………」

「大丈夫ですか、マミさん?」

「大丈夫、大丈夫よ……………私は大丈夫……………」

「無理はしないほうがいいよ。その様子じゃ、どうせユーはもう戦う事も出来そうにないし」

肩で息をするマミを気遣うまどか、さやかとは対照的に、ウシワカの口調は冷たいものだった。

「何よあんだ。あんたに何が分かるって言うのよ!？」

「分かるさ。だってその子はもう無理だろう? 戦闘に対する恐怖、それから拒絶の反応が出ている」

マミの不調は変身した事による戦闘体勢を取った直後だ。マミが魔女戦で命を落としかけたのはほんの少し前の事で、マミにはまだそのときの恐怖がこびりつく様に残ったままだ。それを変身したことで一気に思い出し、先の体調の変化に繋がっていた。

「そんな人間が戦地に赴いてもただ死に行くようなものだよ、ベイビー？」

ウシワカにとって、それは何度も見てきた光景であり、また自身の投影でもあった。彼もまた、一度は死を覚悟し生きる希望を失いかけたことがある。

だが、そんなことを知らないさやかにとって、ウシワカのその態度は酷く気に障るものだった。

「……帰ってよ」

「さやかちゃん？」

静かな口調。だがその裏にはどす黒いものがある。それを感じ取ったウシワカは息を吐くところ告げた。

「ふう、仕方ないね。ま、ミーとしては聞きたいことは聞きたいし、アマテラス君ともこうして逢えた訳だからもうこれ以上この時代に残る意味もないしねえ」

『なんでイ、もう行くのか？』

「当然だとも。それともゴムマリ君はこの時代に残りたいのかい？」

『ケツ、テメエに言われるまでもねエ』

そもそもウシワカ達がこの時代に来たのは犬となってしまうているアマテラスを連れ戻す事だった。こうして逢えた以上、この時代に残る意味は無い。先の質問もただの好奇心から聞いたものであり、本当に必要な情報ではなかったのだ。

「ま、そういうことだよ。さ、行こうかアマテラス君」

「くう〜ん……」

犬はウシワカと少女達の間をキョロキョロと見比べたが、結局はウシワカに連れられ部屋から出て行った。

「それじゃ魔法少女の諸君、シーユー」

「ごめんなさい、みんな。少し一人にしてもらえないかしら……」
ウシワカ達が出て行ってからしばらく経って、マミが消え入りそ
うな声でそう言う。

それはさやか達が今まで見てきたマミの姿とは程遠い、今にも枯
れ折れてしまいそうな花のようだった。

「そんなの、ダメですよマミさん」

「そうだよ、一人になんて出来るわけないよ。だってあたし達”友
達”じゃないですか！」

そんなマミを後ろから抱きしめ、さやかは優しく言う。

さやかにとつてマミは偉大な存在だった。だが今その背中では小さ
く振るえ、押しつぶされそうなほどにか弱いものだった。過酷な重
圧を背負い続けてきたその肩は、さやかが思っているよりずっと華
奢なものだった。

「鹿目さん、美樹さん……」

「マミさんはずっと一人で戦ってきたからちょっと疲れてるだけで
すって。すぐに元通りになりますよ！ だからそれまでは ほむ
らが頑張るから！」

「結局私に振るのね」

「何よ、仕方ないじゃない。あたしとまどかは戦えないんだしい！」
「はあ、そうね。あなた達を戦わせるわけにはいかないものね……」

わずかに明るくなる雰囲気。それを意識しているのかどうかは分
からないが、さやかのその性格はマミにとつて光明にも見えるもの
だった。

「暁美さん、ごめんなさい……私なんて言ったらいいか……。貴方
のこと、誤解していたのかも知れない。本当にごめんなさい……」

ほむらは最初からキュウベえと敵対していた。マミにとつてそれ
は自分と敵対していることと等しかったわけだが、こうなってしまう
えばキュウベえが味方であったということすら危ぶまれる。それを

理解してしまったマミは邪険に扱ってしまったほむらへの謝罪の言葉しかなかった。

「その必要はないわ。貴方は何も聞かされていなかったのだから何も知らなくて当然よ」

「ほむらちゃんは、全部知っていたの……？」

「……そうね。貴方達の知らないことも私は知っているつもりよ」
「む、じゃあ何で話さなかったのよ！ あんた、まさかキュウベえと同じで……！」

先ほどまでの緊迫感はないとは言え、さやかはほむらに疑惑の念を押し付ける。だが、ほむらはそれを正面から受け止めると自分に非があることを認めた上で言った。

「話したところでどうなるか、私はそれを知っていただけよ。他意はないわ。それに、私の言う事など信用しなかったでしょうしね」

「……ほむらちゃん」

「……ごめん」

「いいわよ、別に」

「ごめんなさい、晧美さん。貴方は全てを知っていたからこそ二人をこちら側に引き込むことを阻止しようとしていたのね……」

マミは床に手を付き身体を丸める。そして大粒の涙をカーペットに落とし染みをいくつも作っていた。

「ありがとう……そしてごめんなさい」

「マミさん……」

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

その謝罪が誰に対するものなのか。それはもしかするとマミ自身にも分かっているのかもしれないのかも知れなかった。

『ンで？ どうすんだアこれから』

「どうするも何も、帰るんだよ。ユーが幽門扉を開けてね」

一方。マミの部屋から追い出されるように出てきたウシワカ達は

特に当てもなく河川敷の道を歩いていった。すでに日は暮れてしまっただが、まだ若干の明るさを保っている。

『だから言ってるじゃねエか。その幽門扉が開かねエって!』
イツスンがそれを初めに試したのはマミの部屋から出てすぐだった。だが、本来なら開くはずの幽門扉は何の反応も示さず、全く開く様子はなかった。霊的な場所が悪いのかもという事で何度か位置を変え試すが、結果は同じだった。

「ふう、全くユーはいつになっても役に立たないねえ」

『ンだとテメエ! だったらテメエがやってみろイ!』

「勿論さ。ユーに出来てミーに出来ないことなんてあるわけないしね」

「ホワイ?」

自信満々に言っていたウシワカだが、それでもその空間に門が開く様子はない。傍から見れば棒切れを振り回している変な格好をした変な青年だった。

『プププ! 偉そうにいいやがってエ。結局テメエも出来ねエじゃねエか』

「おかしいな、手順は間違っていないはずだけど」

ウシワカはその棒切れ ピロウトークという名の笛を不思議そうに眺めていたが、その足元にまだ幼い子供が寄ってきていた。

「おにーちゃん、なにやってんのー?」

『なんだア、このガキイ』

「ゴムマリ君、彼はこの時代の普通の人間だよ」

『んなこたア見りゃわかるってんだイ!』

ウシワカは犬の鼻先にいるイツスンに放したつもりだったが、子供は不思議そうに首を傾げた。

「おにーちゃん、なんでわんこと話してるの? へんなの」

『あア? このイツスンさまが犬に見えるってのかこのガキイ!』

「おにーちゃんのカッコウっておんみよーじって言うんでしょ?

「こすぶね？」

『おいコラア！ オイラを無視してんじゃねエ！』

「あ、ママ！ ママー、へんなおにーちゃんが……」

『待てこのガキイ！』

自分の言いたい事だけを言うと、通りの向こうに母親の姿を見つけそれに駆け寄っていった。母親は子供の肩を抱えると小声で「見
てはいけません」と言い、足早にその子連れて逃げるように去っ
ていった。

「ふむ、どうやらゴムマリ君の声が全く届いていなかったみたいだ
ね」

『あア？ どういうことでエ』

「どうもこの時代には靈力やら神通力やらが通用しない時代みたい
だ。幽門扉が開かないのも妖精であるゴムマリ君の声が一般人に届
かないのもそのせいかもしれないね」

イツスはコロボツクルという妖精の一種だ。ほんの小虫程度の
大きさしかない彼らにとって、普通の空気振動を行う会話は行えず、
念話という形で会話を行うことになる。彼らにとってそれは当たり
前のことであり、また彼らのいた時代でもそれが通用していたのだ
が現代において必ずしもそれが通るわけではなかった。

『でもさっきのマミ姉エ達には聞こえてたじゃねエか』

「あれはきつと彼女らが特殊な力を持っていたせいだろう。それに
アマテラス君」

イツスを宿した犬。その身体には本来あるべき神器も隈取りも
ない。

「ミー達にすら真の姿がほとんど見えなくなってしまっているこの
状況。この時代には神様に対する信仰というものがほとんど失われ
てしまっているみたいだね」

常闇ノ皇ツギミノミコと立ち回った太陽神としての姿。見惚れるようなその神
々しさはもはや失われ、ただの白い犬になってしまっているアマテ
ラスにウシワカは落胆する。

「ミー達が元の時代に戻るにはアマテラス君の力が必要だ。だけどそのアマテラス君ですら力の大半を失ってしまっている」

『じゃあどうするってんだア？』

イツスの疑問に、ウシワカはしぶしぶといった感じで答えるのだった。

まどかがマミの部屋を出たのはウシワカ達が出てからしばらくしてからのことだった。

もう遅いから今日は帰りなさいとマミに促され、三人は仕方なくといった面持ちでそれぞれ帰路に着いた。

さやかは途中までまどかと同じ方面に向かっていたが、病院に寄りたいたいということで一度分かれることになった。すでにお見舞いの時刻は過ぎているのだが、一応行って見るとさやかは言っていた。

ほむらは初めから変える方向が違った。随分とまどかを気遣う様子を見せていたが、さやかから「過保護過ぎじゃない？」と茶化され気を悪くしたのか恥ずかしくなったのか、あっさりとまどか達から別れたのだった。

不意にまどかの携帯が音楽を奏でた。

鞆から取り出しディスプレイを確認すると、先ほど別れたばかりの名前が映し出されていた。

「あれ、ほむらちゃんからだ」

通話ボタンを押し耳に当てる。そこから聞こえてきたのは若干ノイズの混じった声。

『まどか、今どのあたりにいるの？』

『今家に向かっているとところだよ。どうしたのほむらちゃん？』

『そう、ならいいわ。決して駅方面へ向かつては駄目よ』

『え、それって』

それだけを伝えるとほむらは電話を切った。まどかの携帯から聞こえてくるのは不通を示す機械音だけだった。

「切れちゃった。どうしたんだろ、ほむらちゃん。何か急いでたみたいだし……」

まどかの心にほんの少しの恐怖がちらついた。

来るな、ということはその方面に何かあるのだ。それが何であるか、またほむらが魔法少女であるという事実がまどかに一つの仮説を立てさせた。

「もしかして……」

魔女。

魔法少女が狩るべき存在。そして、魔法少女の成れの果て。

「どうしよう、でも来ちゃダメって」

まどかは家に向かっていた足を止め踵を返そうとする。だが、先ほどのほむらの警告。そして夕刻の戦いを思い出すとその動きも鈍くなる。

「ゴメンほむらちゃん。やっぱりほつとけないよ!」

しかし、まどかは身体の振るえを押さえ込むと、意を決して走り出したのだった。

「あれ、まどかだ」

さやかがその姿を見つけたのは、病院から出てからの帰り道だった。結局受け付けでお見舞いは断られ、仕方なく家に向かっていたので。

本来ならまどかの背を追うような形になるのだが、さやかが見付けたのはまどかの横顔。帰り道とは違う方面へ向かう姿だった。

「どこ行ってんだろ? 家とは別方向だけど……」

そのどこか緊迫した雰囲気になにかを感じ取ったのか、さやかもまたまどかを追いその方面へ足を向けた。

駅へと急いでいたまどかが異変に気づいたのは周囲が暗くなって

からだだった。

気付けばそこは知っている町並みから、どこかの塔のような場所に立っていた。

「あ、あれ？ 嘘……そんな、まだ着いてないのに！」

不意に強い横風が吹き、まどかの体躯がそれに流され膝を突く。そしてその足元の風景に絶句してしまった。

そこは途方も無く高いところだった。

あたりは夜になってしまったように暗いが、その足元の闇はそれを凌駕するものだった。

まどかが立っていた場所。それは幅が三メートルほどしかない連絡通路様な場所だった。ただしその通路には転落防止の柵など存在せず、少し足を踏み外せばあっという間に奈落に落ちていつてしまふ。

真つ直ぐに伸びた通路。その先に大きな塔のようなものが見えるが、肝心の入り口が塞がっている。背後にもまた塔があるのだが、こちらも中に入れるような箇所が存在しない。まどかは完全に封鎖された通路の上に置いてけぼりになっていた。

そんな状況に恐怖を覚え体をすくめていたまどかに、何者かの雄たけびが聞こえてきた。

「きゃあ！ イヤだ、イヤだよ……」

魔女の結界に迷い込んでしまえば生きては帰れない。

そう最初に告げたマミの言葉が今更ながらにまどかの心を蝕んでいた。その恐怖に怯えるまどかをあざ笑うかのように異形のものか姿を現した。

それは羽を持ち、悠々と通路の上を飛び回っている。人間のような四肢を持ち、その腕はまどかの胴体ほどもある。尻尾の先は蛇のようになっており、時折奇声を上げていた。

「ひい」

それはまどかの前へと二足歩行で降り立つと、不吉な輝きを持つ目でまどかを見下ろした。そして拳を振り上げると、あっさりと振

り下ろした。

通路を穿つ破壊音。

まどかは震える足に何とか力を込めるとそれをかわし、必死に通路を走り距離を取ろうとする。魔女によって打ち付けられたされた石畳の通路はあっけなく窪み、それを自身に食らえばどうなるかを一瞬で把握してしまえることをまざまざと見せ付けるだけの破壊力だった。

通路の端の塔へと何とかたどり着いたまどかだが、そこは壁になっっており逃げ場はなかった。振り向くとゆっくりこちらに向けて歩いてくる恐怖の象徴。きつとそれはもう自分を逃がしはしないだろう。それを直感的に感じ取ってしまったまどかの足からは力が抜け、へたり込んでしまう。

「誰か……誰か助けてっ！」

悲痛な叫び。それは誰にも届かない。

そのはずだった。

「え……」

急に魔女がうめき声を上げ、その身を大きくよじる。見れば蛇の形をした尻尾が切れてなくなっていた。苦痛に身もだえするその隙を縫って、誰かがまどかの身体を抱きかかえ、大きく跳躍し魔女と距離を取る。

その人物の顔はまどかも良く知っているもの。

「さやか、ちゃん……？」

つい先ほど別れた美樹さやかのものだった。

ただ、その姿は女子中学生のものとは違い、まるで漫画の中に出てくるようなものであった。それが何を意味するのか、まどかには良く分かっていった。

「さやかちゃん、どうしてっ！」

『間に合ってよかったね、まどか』

「キュウベえ！ あなたまさか！」

そのさやかに付き添うように肩に乗っていた小動物キュウベえに、

まどかは驚愕の声を上げる。

キユウベえはその赤い瞳でまどかを見上げると、どこか嬉しそうに言うのだった。

『そう、そのまさかだよ。美樹さやかは僕と契約をして魔法少女になった。いずれ魔女になると分かっていたいなからね』

「そんな！ どうして！」

「だって、だって仕方ないじゃない！」

さやかは持っているサーベルを握り締めると搾り出すような声を上げた。

「黙って見とけって言っの！？ 友達が襲われてるんだよ！ このままじゃ死んじゃうんだよ！？ そんなの、出来るわけないよっ！」

「さやかちゃん……」

「マミさんやほむらにはああ言っただけど、あたしは悔しかった。ただ守られてるだけの自分が悔しかった！ 何も出来ない自分が悔しかったっ！」

さやかはサーベルを腰打めに構えると、こちらに怒りの形相で向かってくる魔女を睨む。

「大丈夫だよ、まどか。今度からはあたしが守って見せる。ずっと一人で戦ってきたマミさんも、今度はあたしが守ってみせるっ！」
そして一足で魔女に向かって跳ぶと、そのサーベルを振りぬいたのだった。

しばらくは好調だった。

魔女の攻撃は破壊力も大きく脅威のそれであったが単調であり大降りだった。さやかはそれを逆手に取り、攻撃の度に出る隙を付きそのサーベルと何度も突き立てていた。だが、巨体に似合う耐久力をもつ魔女を倒すだけの威力はサーベル一本では足らず、すでに魔女の体にはいくつも突き刺さったままになっていた。

だが、それも何度か続けているうちには魔女も膝を折り、もうすぐ撃退出来ようかと思っていた時だった。

何者かの雄たけびが再度結界に響き渡ったのだ。

そして現れたもう一体の魔女。先の瀕死のそれと瓜二つの魔女は全くの無傷のままさやかを挟み撃ちにするような位置に降り立ったのだ。

一体の時とは違いお互いの隙を埋めるように連携を取りながらその腕を振り回す魔女に、さやかは反撃の糸口を見つける事が出来ず、徐々にその体に傷を増やしていった。

「くっ！ 何よ、二匹もいるなんて聞いてないわよっ！」

「ああ、このままじゃさやかちゃんか……」

『彼女を助けたいかい？』

「キユウベえ……」

『どうやらこの魔女は二つで一つの存在のようだ。あの連携を崩すには一人では荷が重い。このままでは美樹さやかは負けてしまうだろう』

「そんなっ！」

『でも、まどか。君なら彼女を助けてあげられる。君にはそのための力が備わっているんだ』

「わたしが……わたしも契約すれば……」

『そうさ。きつと君なら一人でもあの魔女を圧倒出来る。美樹さやかも魔女にならなくて済むかも知れない』

それは甘美な誘惑でもあった。

そして卑劣な畏の誘いでもあった。

だがまどかは、畏だと知っていながらもさやかを助けたいと願った。

「それなら、わたし……わたし！」

キユウベえのほくそ笑む声が聞こえたような気がした。

だが、それだけだった。

「その必要はないよ、ベイビィ？」

「だ、誰っ!？」

「天呼ぶ、地呼ぶ、海が呼ぶ……物の怪倒せと我を呼ぶ!」
塔の上、遙か上空にいるにも関わらずその声は結界全域に聞こえるようなものだった。

その声の主はさやかへの傍に降り立つと、腰に差した刀と笛を両手に構えた。

「人倫の伝道師、ウシワカ イズ ヒア!」

『ケツ、なアにカッコ付けてんだテメエは』

「ウシワカさん! シロちゃんにイツスンちゃん!」

ウシワカと同じくして結界に姿を現したと犬は、まどかの傍に駆け寄ると安心させるようにその顔を舐めた。

『また来たのかい君たちは。ここは君たちのいるべき場所じゃないんだけどなあ』

「そんなことはミーにも分かってるさ。ただ、少々都合が変わってしまったてね。この時代での協力者が必要になったのさ」

ウシワカはキュウベエの言葉を受け流すと手に持った笛を、まるで鞘から抜くようにスライドさせる。するとそれは一本の光る剣となり輝きを放っていた。

「さあ、これ以上の言葉はナンセンス! こんな物の怪はパッと倒してしまふよ!」

さやかと背中合わせに構えると、ウシワカは意気揚々と言い放った。

「レッツ ロック ベイビー!」

「凄い……」

それは圧倒的な力だった。

さやかの動きは確かにぎこちないものだったが、ウシワカのそれは歴戦の戦士を思わせるものだった。一切の無駄が無く、魔法の腕を全て紙一重で交わすと流れるように切り刻む。一筋の光となり魔法を翻弄するその姿に、さやかも負けじとサーベルを突き立てる。

魔女の連携はあっさりと崩され、逆に攻撃しようとするればその全てを逆手に取られる。

ウシワカが加わる事でいとも簡単に形勢が逆転し、やがて溶ける様に二体の魔女は同時にその姿を消していった。

魔女が倒れると同じように結界も崩れ去り、跡に残ったのは二つのグリーンフシードだけだった。

「ふむ。正直な話、今戦ってみて分かったけどミーに倒せない敵ではないね」

「あんた達……」

「ああ、そうそう。文句を言われる前に一つ試しておきたい事があるんだけどいいかな？」

「試したいこと？」

ウシワカは刀を納め笛を元の形に戻すとさやかへと歩み寄った。

さやかもまた変身を解くといつもの制服姿へと変えたのだった。

「そう、ユーの力を見せたいんだ」

「……これのこと？」

しぶしぶといった感じでソウルジェムをウシワカに見せるさやか。その目からは敵対の意思は見えないが、特に信頼しているといったものでもなかった。

ウシワカは出されたソウルジェムを観察すると、懐から一本の筆を取り出した。

「……やはりこれは”呪い”だね。それもタタリ場のものに近い」

そう言うつや否や、ウシワカは流れるような動作でそのソウルジェムを筆で円を描く様になぞった。光を帯びた軌跡を残し、その動作を終えると同時にソウルジェムから黒いもやのようなものが立ち上り、やがて消えた。

「え……」

『ソウルジェムの穢れが浄化された……？』

「ふうむ。完全に除去出来るわけではないね」

さやか、そしてキュウベえからは信じられないといった声がもれ

る。

「あなた、今何したの？」

『今のは筆しらべっていう業だア』

さやかの問題に答えたのは、近くに寄ってきていたイツスンだった。

『元はといえばこのアマ公の神通力なんだが、一応オイラ達にもある程度は使えるからなア』

「どうもこの石が黒く染まったらユー達は魔女という存在になるんだらう？ だからここはお互いに協力してみないかい？」

ウシワカは筆を仕舞うと指を垂直に立てて言う。

「どういうことよ？」

「ミー達が元の時代に帰るにはアマテラス君の本来の力が必須なんだ。でもその力を取り戻すためにはこの時代に神様の威光を伝えて信仰を集めなくてはならない。そのための足がかりが必要なんだ」

ミーにも拠点が必要になるしねとウシワカは言う。

「ミーはユー達を利用して神様の信仰を集める。ユー達はミーを利用して魔女化を防ぐ。良い協力関係だとは思わないかい？」

「で、でもあたし達が穢れを浄化する方法はそれだけじゃないし。

グリーンシードがあれば……」

「そのグリーンシードって言うのは、あれのことかい？」

先のグリーンシードが落ちたところ。そこには犬が座っており、その足元には二輪の花が寄り添うように咲いていた。

「え、ちよ！ 何でまた花が変わってるのよ！」

「何故って、花が変わるのは自然なことじゃないのかい？」

だってシードって言うのは種のことなんだろうと当たり前のように言うウシワカ。

「まあまあいいじゃないか。どうせユー達の穢れはミーが取って上げられるだし」

「ぐっ、なんか良い様に利用されてる気がするわ……」

悔しそうに歯軋りをするさやかだが、その顔にはどこか安堵の表

情が浮かんでいた。

「そうそう、ミーには未来を予知する力があるんだけど、ユー達に一つの予言の言葉をプレゼントするよ」

不意にウシワカはそういうと、なんと形容すればよいか分からないポーズを取ると自慢げに言う。

「赤毛のあの子とガール ミーツ ガール！」

「はあ？」

「フッフ、それがユー達の未来のキーワードさっ！」

ちよつと寢床の確保に行つて来るよ、とウシワカは背を向ける。

「それじゃ、ハヴァ グッド ライフ！」

そして颯爽とこの場から去っていつてしまった。

「……なんなのよ、全くもう」

あとに残されたさやか達にはなんとも言えない空気が流れているのであった。

シー ユー アゲイン！

レッツ ロック ベイビー！（後書き）

魔法月民ウシワカ マギカ！ 来週も見てネ！

はい、すみません。

主人公はアマ公です。でも今回全然目立ってません。全部イズヒアがもって行きやがりました。

ええ、こうなることはわかってたんです。

。。（ノ、）。。・ブワッ

はい、ということとで説明回。あとがきも長いよ。

今回必要になったのは今後の展開の布石。たくさんあります。

・マミの戦線離脱

これは杏子登場に繋がります。

・魔法少女から魔女化のネタバレ

マミが生きているのでまどかとさやかが魔法少女になるのをしる理由付け。

・幽門扉が開かない

ウシワカ達が物語に積極的に参加せざる終えない状況作り

・イツスの声が一般人に届かない

イツスが普通に町を歩くのに不自由ないようにするため（変な生物がしゃべってたらキケンなので……）

・ほむほむの別行動
まどかを助けにこれない理由付け
ちなみにほむほむが退治してた魔女とさやか達の魔女は別物です

・上条未登場
今後のストーリーに重要なのです(たぶん……)

・今回の魔女
分かる人は分かるでしょうが、デモンズソウルのマンイーターです。

途中で二体出てくる。

一人じゃ厳しい。

あと恐怖の象徴。

簡単には倒せない相手。

それら全てをクリアしてくれた良い子です。でも戦いたくねえ
(A、)

こんなものかな？

これらを一つの話でやろうとすれば、まあ長くなっても仕方ないかなあと。

次回からは普通の長さに戻るはずですよ。

何かに頼ってる奴は何も出来ないのさっ！（前書き）

随分と放置してました。そしたら三人称での書き方忘れてました
ははは……

はい、すみません。

杏子登場回。本編で言つと5〜6話。

つまりメインはさやかと杏子です。アマ公は……（・A・）

何かに頼ってる奴は何も出来ないのさっ！

蒼く晴れ渡った大空の下、太陽の光を反射させているビルにその恩恵の半分程度を奪われている小さな商店街がある。近くに出来た大型ショッピングモールの影響を色濃く受け、幾つかの商店ではシヤッターが閉じられている。人通りもまばらで、買い物をするより通り過ぎる人のほうが多いその通りに一匹の白い犬が歩いていった。

散歩には飼い主らしき人物は連れ添っておらず、また首輪をしている様子もない。だが商店の店員たちは一応にその犬に声をかけていた。

「よー、わんこ。朝からお散歩かい？」

「あらまあ白ちゃん。今日も元気そうねえ」

「お、ポチお使いか？ つて、んなわきゃねーか」

それらに愛想を振りまき、時には立ち止まり頭を撫でてもらう。露店に並べられた食材等を物欲しそうに涎をたらしながら眺めては、おこぼれをもらったり叱られたりしている。

このマミの家で暮らすようになって以降、ここは犬にとっての美味しい場所だった。

その気の抜けるような顔つきがどうも人気らしく、犬を見ては触ったり食べ物を与えたりと随分可愛がられている。平日はこうしてマンションを抜け出しては町を徘徊するのが日課になっていた。

ふと、犬がその鼻をひくひくと動かし通りを駆け出した。その方向には一人の少女。マミ達と同年代と思われるその少女だが、平日だというのに私服で歩いていた。

「あん？ なんだいこいつは？」

「あつっ」

犬は少女の周囲をぐるぐると回ると尻尾をぱたぱた振り座る。

「やあ、杏子ちゃん。久しぶりじゃないか」

「あ、おっちゃん」

杏子と呼ばれた少女に声をかけたのは八百屋の店長。恰幅の良い体格に青いエプロンをかけている。

「なんだい、またバイトでもしてくれるのかい？」

「おっちゃん。何度も言うけどあたしはまだバイトが出来る年じゃないんだよ」

杏子は懐から菓子箱を取り出すと、一つそれを口に啜える。その様子を物欲しそうに犬が見ていた。

「ちよつと呼ばれたからこっちに帰ってきただけさ。場合によっちゃすぐに、ってこら」

犬は二本足で立つと杏子の口元に鼻を近づけ匂いを嗅ぐ。

「はは、こらポチ。人のお菓子を手を出そうしちゃ駄目じゃないか」「くうくん」

「この犬、おっちゃんが飼ってるの？」

「いいや。このあたりに住んでる女の子が良く連れて歩いてるんだよ」

「ふうん」

杏子はその笑っているような顔をした犬の頭を軽く撫でると、箱からお菓子を一本取り出し犬の鼻先に差し出した。

「食うかい？」

「わんっ」

犬は勢いよくそれに飛びつくと、杏子の手まで啜える勢いで食べ出したのだった。

「それで、話って何？」

太陽が空高く上がった頃。昼食時となった学校の屋上にほむら、まどか、さやかの名が顔を合わせていた。直前の授業が終わってすぐにまどかがほむらを誘ったのだ。

「ええっとね、さやかちゃんのことなんだけど……」

その一言で何を言い出そうとしていたのか察知したほむらは、ま

どかが誤るより先に非を詫びた。

「貴女が気に病むことではないわ。むしろ誤らなくてはいけないのは私のほうね」

魔法少女になるということ。それは即ち魔女化してしまう危険性も孕んでいる。思わぬ出来事によりそれをまどかとさやかに知らせることが出来たというのに、結局さやかを巻き込んでしまったことは自分の責任であると言った。

「ちょっと待ちなさいよほむら。アンタが謝るようなことじゃないじゃん。そりや確かに何で助けに来てくれなかったのよって最初は思っただけさ、アンタはアンタでちゃんと戦ってたんだし。キユウベえと契約したのはあたしの意志なんだから、頭下げられる理由なんてないわよ」

『全くその通りだつてんだあ。むしろ謝らなくちゃいけねエのはさやかの方だなア』

ぴよんぴよんと、さやかの肩の上を跳ねているのはイッスン。いつもの犬の頭ではなく、今日はさやかに付いて学校まで来ていた。

「ちょっと、アンタは黙ってなさいよ。つか、なんであたしに付いてきてんのさ」

『そりやおめエ、ピチピチのねエちゃんがいるってんだから来ねエわけにはいかねエだろ。プヒヒヒ』

まあちょっとばかり幼すぎるのがいけねエがな、といやらしく笑う。

「イッスンちゃんはさやかちゃんと仲良しだもんね」

「そうね、お似合いよ貴方たち」

「ちょっと、どついう意味よそれっ!」

「そういえばさあ、今日マミさん休みなんだね。心配だなあ」

折角みんな揃っているからということと屋上で揃って昼食を取ることになりベンチに三人と、さやかの肩にイッスンがそれぞれ座っている。話の話題はいつしかマミのものに代わり、まどかとさやか

は心配そうに声のトーンを落としている。

『まあ昨日のあの調子じゃしばらくまともにも動くのは無理だろうな
ア』

「うん、まあそれもあるんだけどさ」

具合の心配。それもあるのだが、さやかが危惧しているのはそれ
だけではなかった。

「あのウシワカってやつも結局マミさんのウチに寝泊りすることにな
ったんでしょ？ それっていいのかなあって」

ウシワカの年齢は定かではないが、まだ若い青年であるということ
とは見た目から判断出来る。そんな二人が同じ屋根の下で生活する
ということに貞操観念を抱いているのがさやかだった。マミの事を
崇拜しているといっても過言ではないさやかにとって、マミの身の
心配は自分と同義でもあった。

「それは余計な心配でしょうね。そんな過ちを犯すような軽い男で
はないでしょう」

『全くだな。あの野郎はアマ公のことしか目にねエからな』

そのことについてそれほど関心を抱いていないのがほむらとイッ
スンだ。それぞれの言い分は違えど、ウシワカがマミに手を出すと
いうことはないだろうというのが二人の共通した考えだ。

それに対し、まどかはまた違った思いを抱いていた。

「でもいいなあ、そういうのって。ちょっと懂れるよねえ」

「！？」

どこかうつとりとした感じでそういうまどかに、顔色を変えてし
まうのはほむらだった。

「ええ！？ まどかあんたまさか……！」

「ち、違うよぉー！」

「くうう！ 許さん、許さんぞぉ。まどかはあたしの嫁になるのだ
からぁー！」

「ひゃあ！ さやかちゃんくすぐったいよぉー！」

「……」

「なんでエ、ほむら。妙な顔付きしやがって。あれに混ざりてエのか？」

「……そんなわけないわ」

しかし、そういうほむらははしぎあう二人から目を離す事はなかった。

放課後。ほむらは用事があるからといい先に帰ってしまった。その用事がまた魔女関連であることはまどか達にも分かったのだが、それに付いていくようなことはしなかった。昼の時間にほむらから警告されたからだ。イツスンもまたほむらの穢れを取り払うべく付いていつている。そのため帰り道ではまどかとさやかの二人で歩いていた。その道すがら。河川敷の芝の上に二人並んで座り川の流れをぼんやりと眺めていた。

「さやかちゃんはさ、怖くはないの？」

唐突に言ったことだが、さやかにはそれが何を意味するのかすぐに分かった。

「ん？そりゃあちよつとは怖いけど……昨日の奴にはなんとか勝てたし。ソウルジェムの穢れを取る方法もあたし達にはあるわけだし、それにもしかしたらまどかをに亡くしてかもしれないって。そっちの方がよっぽど怖いかな」

キユウベえから説明を受けなかった魔法少女の裏の事情。そして命を懸けて戦わなくてはいけないという状況。その二つを理解した上で契約を果たしたさやかだが、それでも彼女の表情には笑顔がある。大切な友を守れたという自信と、一人ではないという安心感からくるものだ。

「だからさ、あたしは嬉しいって気持ちのほうが大きいか。確かにキユウベえに騙される形で契約したかもしれないけど、ようは魔女化しないように気を付けてればいいんだし、あたし一人で戦うわけじゃないしね」

今なおどこかで魔女と戦っているであろうほむらの事を思う。ほむらもまたほむらなりの考えを持って戦っているのだろう、と。同じ境遇に立てた今だからこそさやかにはそれが分かった。

「だからさ、あたし戦おうと思ってるの。今までは、言ってみればずっとマミさんに守られてきてたわけじゃん？ でもそのマミさんが戦えなくなっちゃったわけだし。そうになると、今度はマミさんの代わりにこの町を守ってあげるのが後輩としての役目じゃないかなって思うの」

「さやかちゃん」

「そんな心配そんな顔しなくても大丈夫だって。ほら、昨日だって最初の一体はあたし一人で勝てそうだったじゃん。慣れてけばマミさんくらいとまではいかないけど、それなりに戦えるようにはなるわよ。うん、いけるいける！ 見滝原市の平和は、このさやかちゃんが守ってあげちゃうだから！」

そう意気込むさやかの顔には不安の色など見えず、むしろ光り輝いているように、まどかの目には映った。

その様子を遠くから眺める人物がいた。

「ふうん……。あれがこの街の新しい魔法少女ねえ……」

ビルの上から双眼鏡、ただし形はかなり歪なものになっており、それが市販のものでない事は誰の目にも明らかかなもので覗きそう眩く少女。

「あんたが呼ぶなんてよっぽどの事だと思ったけど、まさかただこれの報告のためだったなんて言うつもりじゃないよね？」

確かにマミのやつが離脱したつてのは驚いたけど。そう続けた少女は手にした双眼鏡から手を放す。するとそれは初めからそうだったように、当たり前前の形に戻った。魔法によるエンチャントが解けたためだ。

『そんなことはないさ杏子。僕は君にとって有益な情報を伝えるた

めに呼んだんだ』

「はん、有益な情報ねえ。一体なんだっていうんだ、そいつは」

少女 杏子はお菓子を一口啜えると飲み込むようにそれを食べる。たったそれだけの動きではあるが、そこに一切の無駄はない。

『彼女たちはグリーンフシードによる穢れの浄化を必要としない』

「はあ？ なんだそりゃ。どうやったらそんなことが出来るっていうんだ？」

杏子にとって、いや全ての魔法少女にとってそれは夢のような話だった。そんなことが出来れば魔法をセーブしながら戦う必要もなく、その上仮に一切魔女と戦わなくても穢れを浄化することが出来るのだ。

『方法は僕にも分からない。こういった原理でそうなっているのか、その前例がないからだ』

ウシワ力達のもつ筆しらはキュウベえにとって未知の力だった。有史以前から世界に干渉してきたインキュベーターたちが、別の世界、いわゆる並行世界との情報の共有という技術まで持っていなかったからだ。

『だから君の彼女らと一緒に戦えば、もっと効率良く魔女が狩れると思っただけだよ』

「……………気に入らない」

しかし、杏子の反応は否定的なものだった。

「気に入らないわねそういうの。こっちは命かけてやってんのに、遊び半分で作られるなんてさあ」

杏子の瞳に宿るのは狂気の色。開いた口から鋭く尖った犬歯が覗いていた。

「あんなルーキーがいい気になって魔女狩りしてるなんて、そんなの見たらぶっ潰したくなっても仕方ないよねえ」

そうだ、ついでにその便利なやり方もあいつらから奪ってやろう。そっくり残しビルの屋上を去る杏子。その後姿を見送ったキュウベえの顔からは何を考えているのかうかがい知ることは出来ない。だ

がその閉じた口の端が若干つり上がったようにも見えたのだった。

太陽も沈み、夜の帳が下りた町並み。その中の一室でさやかは鏡を前に頬をぱしぱしと叩き気持ちを入れていた。

『なんでイ、随分気合入ってるじゃねエか』

「ふん、当たり前でしょ。一歩間違えばお陀仏なんだし。てゆうか、なんでアンタがあたしのところに来てんのよ」

夕刻、ほむらと共に魔女の元へ向かったはずのイッスは現在さやかの部屋で跳ねていた。物珍しそうに部屋を跳び回るイッスをさやかは不審そうな目で追う。

『そりやおめエ、これからまた魔女ってヤツのところに行くんだろオ？ だったらオイラの力が必要じゃねエか』

「そりやまあ、そうだけど……」

ウシワカが行ったソウルジェムの浄化。それはイッスンにも使用可能な技であり、魔法少女に付いて歩く存在としては一応最適なものだった。だが、イッスンの思惑はそれだけではない。

『それに、おめエは見たところ無茶をする感じのヤツだア。そういうところがアマ公そっくりなんだよ』

どこか懐かしむような口調。普段のおちゃらけた雰囲気とは別の空気を纏ったイッスンの姿は、目で確認は出来ないが寂しそうなものだった。

『それに、そういうヤツの手綱を引くのはオイラの得意とするところでエ。それにやばくなったらすぐ逃げ出すから安心してナ。プヒヒヒ』

「途中で逃げたりしたら踏み潰してやるんだからね……」

目を細めてイッスを睨むさやかの顔には、別の意味での不安の影が見えていたのだった。

家を抜け出したさやかの目に一番最初に映ったのは、街灯の下で

佇むまどかの姿だった。

「さやかちゃん、これから……？」

「そ、魔女探しのパトロール。まどかはどうしたの？」

すでに日は暮れあたりは闇に包まれている。こんな時間まで出歩く人物ではない事をさやかは良く知っている。

「あ、あのね。足手まといだっていうのは分かってるんだけど……邪魔にならないところまで一緒に連れてってもらえたらなって思ってた……」

伏目がちにそっぴうまどか。そこからは彼女の優しさが溢れているかのようだった。

「う、ごめんね。ダメだよ……無理いつて……」

「ううん。すっごく嬉しい！」

まどかの手を強く握り、さやかは緊張していた頬を緩ませる。

「分かる？ あたしの手さつきから震えてるの……へへ、情けないよね。あんなに強がってても、結局は怖いんだよ」

「さやかちゃん……」

「まどか、一緒に行こう。まどかがいてくれるなら凄く心強い」

『おいおい、分かっただろうなア。危険は承知の上なのかア？』

さやかの肩にいるイツスンが嗜めるように言うが、さやかはそれきつぱりと言い切った。

「うん。まどかがいるって肝に銘じておけばあたしも無茶なことはしないとと思う」

『はん。ま、おめエがそれでいいならいいんじゃないか』

「ふふ、イツスンちゃん心配してくれてありがとう」

『ケエー、だからそのちゃん付けは止めろってンダイ！』

「……いた！」

大通りから外れた入り組んだ路地の奥。世界が点滅するような不思議な空間と、ふわふわと空中に壊れかけのオモチャのようなもの

がケタケタと笑いながら浮遊していた。さやか達が今まで見てきた魔女に比べると数段小型のもの。魔女からはぐれた使い魔のものだった。

『なんでエ、随分ちつちエ相手じゃねエか』

「丁度いいわ。こちとら初心者なんだし」

さやかはソウルジエムを取り出すとそれに魔力を込め、魔法少女へと変身する。その際に若干色が濁ったのをイッスの目は逃さなかつた。

さやかは手にしたサーベルをナイフを扱うように手下に向けて水平に投げる。手元が狂ったのかそれとも慣れていないからか、やや軌道が逸れてしまい、周囲に突き刺さって終わる。その攻撃でさやかの存在に気付き、一目散に路地に隠れようとした。

「させるかっ！」

すかさず、今度は幾重ものそれを同時に投擲する。動き回る使い魔に当てるのは至難の業だったが、それでも数で押しているため数本は体をかすめ、その動きを低下させている。

「よし、これで！」

さやかは最後の一振りを渾身の力を込め飛ばす。使い魔の中心にピタリとあつた軌道。それは鮮やかに手下の体を貫く。はずだった。

「！？」

その刃が届く直前、さやかのサーベルが弾かれたように軌道を逸らし道端に転がった。

「ちよつとちよつと、何やってんのさアンタたち。あれ使い魔だよ。グリーンシード持つてるわけないじゃん」

そこに現れたのは赤い魔法少女　杏子だった。

「魔法少女？」

『なんでエ、おめえたちの仲間じゃねエのか？　何で邪魔するんでい』

さやか達の注意が杏子に向く。その僅かな隙を縫い使い間は路地

の角へと消えて行く。

「あ、逃げちゃう！」

「追わなきゃ……！？」

走りだとうとするさやか首筋に、杏子の持つ槍の矛先が突きつけられる。一瞬動きを止めてしまったさやかは、使い魔の気配を見失ってしまった。

「だーから、止めるっての」

「何で邪魔すんのよ！ あれ放つて置いたら誰か殺されちゃうのよ！」

「当たり前だろ？ 四、五人食わせて魔女にしちまえばグリーンフシードも孕むんだから、それまで待ちやいいんだよ」

「あんた……魔女に襲われてる人を見殺しにするつもり？」

さやかな目が細く伸びる。構えたサーベルの先も、敵意も、全てを杏子に向ける。

「あんたさあ、大元から勘違いしてるよねえ。弱い人間を魔女が食う。その魔女をあたらしが食う。それがルールってもんでしょ。ガッコーで習わなかった、食物連鎖ってやつ？」

杏子は口の端を歪め、にやりと笑う。

「まさかとは思っけど、人助けとか正義とか、そんな冗談かますために契約したわけじゃないよねえ」

その言葉を合図に、さやかは杏子に斬りかかった。刃は杏子の肩を狙ったものだったが、それは身体に届くことなく杏子の槍に阻まれた。

金属同士が擦れ合う音が路地に響いた。

「生憎とね、あたし達にはグリーンフシードに頼らないでもいい手段があるのよ……だから、あんたみたいなやり方なんてする必要……ないっ！」

「はっ！ それだよ、それ。その温い考え方が気に入らないって言うてるのさっ！ 何かに頼ってる奴は何も出来ないのさっ！」

「うるさいっ！ すぎるこの何が悪いの！ 頼る事の何が悪いっ

て言つたよ!」

「ハッ、分かつてないねえ……一方的にすがつてるアンタは、運命に縛られてるアンタは、実は何も掴んじやいないのさっ! 見せてあげる……あたしとアンタの違いってやつをっ!」

杏子の槍が途中で折れ、いくつかの節に分かれる。多節槍となつた獲物を変幻自在に操り、さやかの身体にいくつもの傷を作つていく。さやかも反撃しようとするのだが、その行動の全てを防がれ、防戦一方に持ち込まれていった。

『おいおい、圧倒的じゃねエか! このままじゃあいつ死んじまうぞ!』

「さやかちゃん!」

イツスの焦り、まどかの叫び。

二人にはそのどちらの声も届いていないようだった。

「これで、終わりだよっ!」

「くっ!」

杏子は壁を蹴り高く飛び、もはや動く事すら出来ないさやかに向かい、体重と落下エネルギーを乗せた槍で今まさに貫かんとしていた。

「だめえ!」

まどかの悲痛な叫びが路地に木霊し、二人の魔法少女の戦いに終止符が打たれようとしていた。

そんな時だった。

『そこまでよ』

天を揺るがすような爆裂音。近くにあったドラム缶が真ん中からはげる様にねじり切られ、中に入っていた水が周囲に撒き散らされる。数瞬遅れて打ち上げ花火のような音がまどか達の耳まで届いてきた。

「……………」

「……………」
「……………」
「……………」

まどかも、戦っていた二人も、イッスンも。全員がお互いの顔を見合わせその動きを止める。

先に動いたのは杏子だった。

「だ、誰だ。一体何をした」

言葉の途中で二度目の爆音。上半分が吹き飛んでいるドラム缶が、更に小さくバラバラに散らばる。飛び散った破片は弾丸のような速度で壁に衝突し、小さいものは突き刺さり、大きいものはピンボールのように飛び跳ね騒音を撒き散らす。

「……………」

もはや言葉もない。一体何が起きているのか、そしてどのようにしてここまで破壊の限りを尽くせるのか理解出来ない杏子は動く事すら危険だと察知した。

だが、逆にさやかたちにはそれがどういった類の攻撃であるのか、なんとなくではあるが把握し始めていた。先のテレパシーでの通告。その声に聞き覚えがあったからだ。

流れる静寂。その静まり返った路地にコツコツと石畳を叩く音が聞こえてきた。

やがて闇の中から姿を現したのは ぼむらだった。

ただ、その手には巨大な銃器が構えられていた。

それはバレットM82A1と呼ばれるアンチマテリアルライフルだった。対物ライフルと言われるその銃器は人間に向けて撃つ事自体を制限されるほどの威力を持ち、過去の戦争では1.5km先にいた敵兵の身体を両断したとされる。その詳細をさやかたちは知る由もなかったのだが、その兵器が今ただの鉄くずと成り下がったドラム缶を破壊した原因であることは理解出来た。

「これ以上の戦闘は無意味よ。引きなさい佐倉杏子」

「!?!」

いきなり名前を呼ばれ困惑する杏子。状況が読めないため下手に動くことが出来ないが、少なくともほむらが自分の仲間ではないことは理解したようだった。

「アンタ、何なんだい？ どこかであったことあるか？」

「魔法少女よ。あなたと同じね」

「魔法……少女？」

手に持った実銃。バラバラに破壊されたドラム缶。かすかに香る火薬の匂い。それは杏子の知る魔法とはかけ離れたものであったが、それに付いて深く掘り下げようとはしなかった。

「ま、まるで手札が見えないとあっちゃあねえ。仕方ない、ここは一旦引くとするよ」

「ええ、懸命な判断ね」

ガチャッと音を立てM82A1を持ち替える。その音がするたびに杏子の身体が怯える様に竦んでいるのがほむらからはよく見て取れた。

建物の屋上へ引いていく杏子の姿を見送ると、ほむらはさやかたちへと向き直り、そしてさやかの怪我を治すべくマミの部屋へと一旦連れて行くことになったのだった。

その道すがら。ほむらの攻撃手段について誰も語ろうとしなかったのは、ある意味で仕方の無いことだったかもしれない。

続く！

何かに頼ってる奴は何も出来ないのさっ！（後書き）

火薬少女あけみ ほむら

来週もまたみてネ！

はい。アンチマテリアルライフルぶっ放してくれるほむらさんを
書きたかっただけでもいう。

アマ公は犠牲になったのだ……

たぶん、次は活躍してくれるはず……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1551t/>

魔法わんこアマ公 マギカ

2011年6月4日23時10分発行